
いつかどこかの俺の世界

世空 心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかどこかの俺の世界

【Nコード】

N3137X

【作者名】

世空 心

【あらすじ】

物語の世界に憧れた、そんな俺は、自分自身が描いた物語の世界の中に入り込んでしまう。そこで出会ったのは、自らが創った設定が原因で孤独を味わう少女だった。「もし、神様が居たらね？何を思っつて、この世界を創ったんだらうって、そう、思うんだ」神様の立ち位置に居る一人の少年と、世界の中に住む一人の少女を中心とした、シリアスだったりちよっとコメディが入ったりする物語。

プロローグ「全ての始まり」

物語の世界に憧れた。

それはいつからだったのか、もう俺は覚えていない。ただ、気づいた時には自分で考えた世界を書きだしていた。

剣を振るって戦う英雄だとか、未知の力を操る魔術師だとか、居るはずのない生き物たちだとか、そんなものに憧れていた俺は、その想像ができる限り、ノートに書き込んでいった。学校での生活や部活動に時間をとられながらも、いつの間にかそれらはノートの山になっていった。

「……l……ie……」

そして今、俺は最後のノートに文章を書き込んでいる。授業で使ってるようなものとは比べ物にならないぐらいに細かく書かれているそれは、買って間もないながらも一種の年季のようなものを漂わせていた。

ようやく、最後の一文字が、ちょうど最後のページの隅っこにぴつたりと収まった。

「いよっしゃ！　ようやく完成だぜ！」

書き上げた喜びの、その勢いのままに立ち上がって、蛍光灯の光を弱めた俺は、同じようなノートが詰め込まれているバッグにソレを詰め込んで、抱きかかえるように持ち上げた。部屋の外に声が漏れないように声を上げていると、自分自身が描いた世界の、その産声を代わりにあげているような、そんな気分になった。その時だった。

「ん？」

声を、聴いたような気がした。自分が呼ばれたかのような、そんな感覚をつけた俺は、バッグを抱きかかえたまま振り返るが、周囲には人影などあるはずもない。

「空耳……か？」

そう、結論付けた。そして俺は、少々の倦怠感と共に、瞳を閉じてベッドに仰向けの姿勢で倒れこんだ。

その直後、目を閉じている筈の俺の目に、不鮮明な映像が飛び込んできた。赤く塗られた荒野に、旧式のテレビにありそうな砂嵐と共に吹く風、映像。地平の向こうまで見渡せそうなほどに遮蔽物のない情景の中に、一組の甲冑がオブジェのように鎮座していた。

剣を垂直に地面に突き刺し、それを寄る辺にするかのようにもたれかかるその鎧は、傷つきひび割れ、防具としての寿命はとうに迎えている。赤さびた汚れの漏れ出すその隙間からは、色の着いた靄が滲み出ていた。

そして、声が聞こえる。不鮮明だが、先ほどよりもはっきりと。

「神よ　その御身、真に　ならば　」

鎧の人物のこえだろうか、そう思われる砂嵐交じりの音声。優しげな深みのある低音の売れに、意思の強さが垣間見えるような、そんな印象を受ける声だった。砂嵐が、激しくなる。

「どうか　を　だろうか」

その言葉を最後に、映像はふと途切れてしまった。

いつまでたつても、ベッドは俺をとらえてはくれない。そんな、妙な浮遊感と瞼の裏の暗闇の中、俺はゆっくりと瞳を開けた。

そんな俺の目の前に広がっていたのは、心地よい陽気に満ちた青空だった。

「つて、何でさあああ!?!?」

そんな叫び声と共に、重力を思い出した俺の体は、地面に向かって落下していった。急な事態に混乱した俺は、ただただ身を固めて目を強く閉じ、迫る衝撃にそなえて身を丸める。

どこかの森の上だったのだろうか、背中に軽い衝撃を受けると枝が折れるような音が耳に入る。同時に枝に生えている数々の葉っぱが、俺の体を撫でる様に包み込んだ。そんな、枝の上に落ちて、折れて、落ちてを繰り返し、減速していった俺の体は、数十秒の間を経てようやく地面に落下した。

「いつてえ……くそ、一体何が……」

体の節々に痛みを感じながらも、衣服にまとわりついている葉っぱを払い落とす。混乱しつつも、俺は自分の置かれた状況を理解しようとして、頭についた葉をつまみつつ周囲を見渡そうとした。直後、人影が目に入る。

少女だった。

「え?」

それはどちらの声だったのだろうか、俺は目の前の少女の存在に驚いて、少女は突然落ちてきた俺に驚いて、そうして、俺たちは互いに視線を交わしていた。妙な感慨に塗りつぶされた時間だった。

少女の髪は長く腰まで伸びていて、その黒は木漏れ日を受けて艶

やかに輝いている。カソックにも似た濃紺の衣服を着ていて、そこから除く顔の肌色はその白さを以て、幼い顔つきながらも達観した何かを感じさせた。

だがそれよりも何よりも、俺は彼女の目　右目に惹きつけられる。深く濃い、人間が持ちえるとは思えない程に透き通った色彩の紅。よく見ると鈍く光っているようで、それは酷く俺の心を惹きつけた。

ああ、ここはそうなんだ　目の前のソレを最たる証拠として俺は、自分の身に起こった現実を理解できたような、そんな気がした。でも、やはり心は混乱していたのだろう。らしくない、臭い台詞が口からこぼれてしまっていた。

「綺麗な……………目だな……………」

それが、コトの全ての始まり。

第一小節「それは唐突なことだから」(前書き)

初版を見てた人は、何が違うか分かる……かも。

第一小節「それは唐突なことだから」

それは、唐突だった。

自分の知覚範囲よりも更に外に感じられる世界の歪み。その歪みから作られた波が、人ならざる存在の、その一部にのみ聞き取れる音となって広がっていた。

「!…今のは…」

その歪みの中心から、さほど遠くは無い場所、そこに居たある精霊が、その波を感知する。人ならざる存在

いくら中心から遠くは無いといっても、それは本来自分が知覚できる範囲の外。そのことにその精霊は首をかしげた。

「私の知覚範囲外からですか……ですが、この感覚は…」

その精霊は、懐かしいようなそうでないような、そんな感覚をその波動から感じていた。歪みが消えた後も、その感覚が残っている。

「何なのでしょう…」

気になる、という好奇心より、行かなくてはならないという使命感に似た何かが感情として沸き起こる。自身が気づいた頃には、体はその中心に向かっていた。

この後、その精霊はその波動を感知出来たことを神に感謝することになった。

目の前の出来事に、思わず言葉を失ってしまう。

森の中を通る道。獣道と呼んで差し支えないような、そんな道を歩いていると、自分の目の前に叫び声と共に少年が落ちてきたのだ。枝が幾本も折れていく音と共に落下してきたその少年は。体中葉っぱまみれで、落下の衝撃のせいか顔を顰めている。

そんな急な登場に思考を停止させながらも、少女は僅かに動く一部分をもってその落下してきた少年を観察し始めた。自分と同じ黒い髪を短く刈りそろえ、やや逆立てている。？を基調としたその服装は見たことも無い様式をしていたが、それが動きやすさを求めたものであることは理解できた。その彼の傍らに転がっているバッグも、彼女の記憶には無い独特な形状をしている。

「いつてえ……つくそ、一体何が……」

苦しそうな面持ちのままですら呟いた彼は、体についた葉っぱを払い落とし始める。まだ彼は少女の存在に気づいてはいないようで、そこに視線をやるといふこともなかった。だが、彼が頭についた葉を取ろうとすると同時に周囲を見渡そうとすると、そこでようやく彼女の存在に気づいた。

「え？」

少年は大きく目を見開いて、頭の上の葉を掴んだままの恰好で固まった。そのままお互いが見つめあう妙な数秒間ができて

不意に、少年が小さく口を動かした。だがそれは非常に小さな声で、聞きとることが出来ない。

「
」

「え？」

少年のつぶやいた言葉に、少女は反応する。その疑問を表す声に、少年は意識を現実に戻したのか、呆けていたその表情を戻すと、気恥ずかしそうに頭を掻きながら立ち上がった。

「ああ、いや悪い悪い、何だか驚かせちゃったみたいだな、これが」

そんな、気の抜けるような台詞。今まで形成されていたやや張りつめた感のある空気が一気にほどけたようで、少女は体の力が緩むような、それでいて何故か呆れ返るような、そんな気分になった。本来持つべきだったのであろう警戒心も、少女はこの少年には働かない。

だがそれでも、少女は少年に訝しむ様な視線を送ると少年に質問をした。

「貴方……何者？」

少女の問に対して、少年は一瞬だけ首を傾げると、明るい調子でこう答えた。

「俺か？ ああ、俺は
つてい……………」

またもや、少年が凍りついた。少年の名乗りを聞き取ることができなかつた少女は、眉をひそめる。

「わ、わりい、えつと……あ……ラスティハルト」

そう、言い聞かせるように、軽く目をつぶってそういうと、視線を再度少女に合わせた。

「……ラスティハルト・ジーンっていうんだ。ちょっと長めなんで、ラスティって、呼んでくれ。それで、君はなんて言うんだ？」

聞きたいことはそれではなかったのだろう。その少年、ラスティの嬉々とした様子での自己紹介に完全に毒気を抜かされたのか、少女は小さく気づかれぬようにため息をついた。しばらく間があって、一言、自分の名前だけを彼女は告げる。

「……ティアマツト・マキナ」

「そっか……あのさ、いきなり申し訳ないんだが……」

少女、ティアマツトの名前を聞くと、ラスティは気恥ずかしそうに自分の後頭を掻くと、地面に落ちていたバッグを拾い上げてこういった。

「……最寄の町にさ……その、どうやって行けばいいか教えてくれないかなって思ってたが……」

「……何故貴方は、上から落ちてきたの？」

「う……いや、あのさ、俺道に迷っちゃまって、それで木の上から見渡せば町か何か見えるかなって思ってたさ、これが。んで、上まで登ったはいいんだが、さっきみたいに落ちちゃってな？ いやあ、

落ちた瞬間は焦った焦った」

今度こそ、ティアマツトは拍子抜けしたとばかりに大きくため息をついた。その横でラストイも安心したように深く息を吐いているのに、彼女は気づくことは無かったが、視線を彼の方に戻すと、その視線を逸らしたのちに言った。

「……着いてきて。途中でわかれる道があるから」

「おお、マジか！　ありがとう！」

無表情に歩みを進めていこうとするティアマツトに、非常に嬉しそうな様子で礼を告げたラストイは、バッグを背負うとその隣に並び立とうとするように、彼女の後ろを追いかけ始めた。

最低限の舗装がされた道の上。修道服にも似た意匠の紺色の衣に身を包み、腰まで伸びた黒髪を吹く風と共になびかせてティアマツトは歩いていった。

荒い土を蹴るブーツにつく砂埃が、彼女が歩いてきた道のりを物語っている。

「変な人」

森が拓けた所で、そう、何か思い返すように唐突に彼女は呟いた。歩く距離が積み重ねられていく内に、周囲に見えていた木々は少しづつその姿を消していき。代わりに舗装された石タイルと幾分かの人影が姿を現してくるようになる。

そうして目の前に、門が見え始めた。

その門を構成している光沢の無い灰色の石材は、見るものに年季を感じさせる。ただし、そこには古臭さが感じられず、それがまた荘厳さを演出していた。城の城門でも、これほどのものだろうかと一瞬思わせるそこには、門の上から垂れ幕がかかっている。それが、校門の持つ威厳とギャップを感じさせ、いささか滑稽に見える。

『私立ハルバルト学院』

そう、風に棚引く文字が、彼女たち

新入生を迎えていた。

門に近付いていくように歩いていく彼女の周囲の生徒たちは、これから待ち受けるであろう学院での生活に夢を膨らませ、友人たちと会話を交わしている。そんな喧騒には一切の関心を向けることなく、彼女は人ごみを通り抜けた。

校門を通るときに、その表情に変化が見られたが、それが何を意味するかはわからない。

ゴシック様式を思わせる石造りの外観の校内に入ると、受付を任されたと思しき上級生が少女を出迎えた。その人物に荷物を預け、自身の名を告げる。するとその生徒から、案内の冊子と学院生であることを証明するバッジが手渡された。左右非対称の幾何模様が描かれたその裏には、持ち主の名前が刻まれる。

T i a m a t t ・ M a x i n a

そう刻まれた文字を見て、

彼女はその表情をわずかに暗くした。

第二小節「式と箱舟」

ティアマツトがこの学院にたどり着いてから幾分か後、その正門の前には疲れ果てたラスティハルトの姿があった。彼が今まで乗っていた馬を引く係員の男性も、その後ろ姿を僅かばかりの同情の念を込めた視線で見つめている。

「あゝ、最悪だ。何でこんなことになるかな……」

乗り慣れない馬での移動で疲れ果てた様子の彼は、もう通る人数が僅かになっている校門を後にして、受付に向かう。もうそろそろ仕事も終わりだと気を抜きかけていた受付の先輩に向かって、ラスティは先ほどまでは持っていなかった紙を提出し、自分の名前を告げた。そして手渡されるバッジ。裏に書かれた文字は *Lastie halt・Xeen*。

「これが、生徒証明の物になるってことか。何かセキュリティでも組み込まさってるのか？」

そんなことを呟きながら、彼はこれから入学式が行われるという講堂に向かって、廊下に設置された標識通りに歩き始めた。

天井までが非常に高く、石造りの構造体が立ち並び廊下には、非常に高価そうな絵画や彫刻等の芸術作品の数々が陳列されていた。ここに来るまでに写真でしかお目にかかったことのないような価値のある物たちを前に、知らず知らずのうちに視線が泳いでしまう。小さな声で、語りかけるように呟いた。

「流石は『お金持ち学校』、沢山金かけてるなあ……」

教育機関の施設の規模だとは到底思えないこの学院をそのように評するラスティ。すると突然、彼は誰もいないはずの隣に向かって語り始めた。廊下には誰の人影も見ることができないのだ。

「ああ、ここはな……………7年前に空城になった城を、こここの校長が異常なまでの安値で国から買い取って、それを学院にするために大規模な工事をしたそうだ」

そう語る彼の表情はどことなく嬉しそうで、こういったことが好きなのだろつということを思わせる。姿の見え無い何者かが彼の隣に居るのだという風に、彼は小さ目な声で説明を続ける。廊下に人影が無いことには、一応それを見計らって話しているのだろう。

「何でもこここの校長は国王と仲がいいようでさ、かなり協力してくれてたみたいだな。何でも次世代を担う新しい人材を育てるためだつてさ。貴族・平民を問わずね」

ヨールティアと称されている大陸の、西部に存在する中規模の王政国家オステレイ。その北部にこの学院は建っている。貴族、平民関わらず教育し、国を担っていく人材を育てるという目標を掲げているこの学院には、人口比で一对一の割合で貴族と平民の生徒が存在していた。

「時代の変化を感じて、貴族だけでの国家の運営に限界を見出したか……………俺のいたところなら、さぞかし賢王とたたえられただろうな」

そんな皮肉げな言い方とは裏腹に、その表情には影が無い。言葉はともかくとして、感心しているのは本当のようだった。

そうこうしているうちに、彼は講堂にたどりついた。開かれた、

その分厚く異様に高い扉の向こうには、同世代の少年少女たちが、立食パーティーとしゃれ込んでいる。平民も混ざるといふ事からの配慮だろう。テーブルに並ぶ料理たちは、サンドイッチなどの手で持って食べられるものや、とにかく食べ方をあまり気にせずにいられそうなものばかりが並んでいた。

貴族と思われる人たちは準正装。平民と思われる人たちはそれなりに高そうな衣服を着込んでいる。お金持ち学校という異名はここでも発揮されていて、四桁の人間が軽く収容できるであろう床面積に、廊下よりも更に高い天井。光すら、シャンデリアに彩られているのではないかと錯覚させるような光景が、そこに広がっていた。

ジャージでいる自分が、不釣り合いだと思えて仕方がない。

そこに居る生徒たちにも、ラストイは興味を抱いている。彼らを見るその表情には、まるで動物園にきた少年と同じような光が宿っている。流石にはしゃぎはしないのだが。

「（おお！すげえ……………ブロンドだぜブロンド。俺初めて金髪碧眼なるものを見たぜ……………お、あれがシルバーブロンドか……………ん？なんか今生物学を完全無視した色が見えた気がしたんだが……………）」

興奮が抑えきれない様子であたりを見回しているそのしぐさから、こういう光景が日常ではない事がありと感じられる。そうして時折サンドイッチを食べつつ散策していると、視界に懐かしいと感じられる色が介入してきた。

「（お！俺以外の黒髪を発見……………）て、あれ？」

その人影は、先ほど出会ったティアマツトのものであった。やわらかい曲線が彫られたやや細めの白い柱に背を預け、広場をずっと

見つめている。その表情は、何処と無く険しい。

「あいつここに居たのか……って、そういやティアマツトが歩いていった道って学院方向だったもんな。むしろ新入生と予測しとくのが普通か」

そう一人で自己完結をしていると、ふとあることが気になった。周囲の人口密度が明らかに少ないのだ。円を描くとまではいかないが、彼女の周辺に人が全く居ない。まるで人避けの結界が張られているかのように、そこには空間と呼べるものが出来ていた。

「（避けられてるのか？ 確かにあのムスツとした雰囲気は近寄り難いと思うが、余りに不自然な気がする……）ま、とりあえず挨拶しとくか。一応世話になったんだし」

そう言いながら、ラスティは彼女に向かって、柱の後ろから回り込むように、近付いていった。

「はあ」

先ほど手渡されたバッジを手で弄びながら、ティアマツトは講堂の片隅、柱に寄りかかるようにして立っている。その眼前には、料理のつたテーブルが並び、新入生たちが思い思いにその交流を広

げている。乳白色の大理石を初めとした白を基調とした内装が、シヤンデリアの灯りを受けてうす赤く色づいている。

それを辟易した様子で、彼女は眺めている。周囲には誰も居ない……… 筈だった。

「わざわざ、入学式」にこんなに料理を用意しなくてもいいでしょうに」

「まあ、お金持ち学校だから仕方ないんじゃないか？」

「っ！？」

独り言に対して、突然死角???? 殆ど背後???? からかけられた声に驚き、彼女は危うくバッジを落としかけてしまう。何とか手にバッジをおさめた彼女は、その表情をあからさまに険しくさせ、振り返る。

「おっと、わりい、驚かせちゃったか？」

そこに立っていたのは、背の高い黒髪に、黒を貴重とした同意匠の上下の衣服???ここに来る道中で出会った……いや遭遇した少年、ラストイハルトだった。

背後から突然話しかけられ、謀らずとも恥ずかしい姿を見られてしまったことに若干顔を紅潮させながら、彼女は彼が発した‘驚かせたか’という質問に答えた。

「いきなり後ろから話しかけられたら、誰だって、驚く」

口調こそ意識して穏やかだが、そこには怒気が見え隠れする。だが彼は、そんな彼女の視線を受け流して、涼しい顔で答えた。

「いやあ、済まない。正直悪気はあったんだが、ここまで驚くとは思わなかった」

悪びれた風も無く、少年は苦笑いを浮かべながら弁明にもならないことを口走る。そんな様子にすっかり毒気を抜かれてしまったティアマットは、肩を落として溜め息をついた。今日初めて会ったはずなのに、何故こつも調子が狂わされるような気がするのだろうか、そう、彼女は思案する。

「それで、なにか私に用事でもあるの？」

追求はすまいと、先ほどのことを無視することにしたティアマットは、素っ気無い態度で少年に接する。ラスティの方は、そんな態度を気にした風は無いが、その反応には一言言わせて貰っていた。

「とうかさ、まずは俺がここにいることに驚こつぜ？」

確かに、ラスティとティアマットは、ここに来る途中、近くの町への分かれ道の所で別れたのだった。だがこつして目の前に居ることを考えると、どうやら新入生としてここに来たようであった。

「確かに驚いたけど、特に気にすることでも無いもの」

向こつこの友好的な態度にも関わらず、ティアマットは素っ気無い態度でラスティに対応している。だがそんなことをラスティのほうも相変わらず気にする様子は無い。ただただ、楽しそうな表情を浮かべたままである。

「まあ、俺にも色々あつてな、これが……」

学院への道のりを聞くために町に向かったのだろうか、そう、彼女は考えたが、すぐにその考えを振り払う。聞くならば初めから学院への道のりを聞いてくるはずなのだ。

「（……でも、私には関係ない……）」

こうして遅れずに間に合っているところを見ると、馬か何かを飛ばして来たのだろう。そう、彼女は考え　それで思考を終えることにした。

「……まあ、俺ここに知り合いなんて居ないしさ、暇だなあって思ってたらティアマツトを見つけたんだよ。どうせなら挨拶しとこうかなってさ。ま、とりあえずよろしく、な」

気を取り直したかのように背筋を伸ばした彼は、ティアマツトに右手を差し出す。それが握手を求めていることに気付くのに一瞬間があり、また呆けた表情をしてしまったが、無事（？）彼女はそれに応じた。

その時彼女は、ラスティの背後に違和感を覚えた。何も無いはずのその空間を、彼女は凝視する。

その視線の先には、大理石の壁があるだけのはず……だった。

「?…?…?」

気を配らなくては気づかないような小さな歪み、風景が捻じ曲がっている。それはまるで、透明な何かがこの人物の背後に存在しているようだ、そうティアマツトは感じた。

そこに視線を向けたままで、彼女はラスティに疑問を投げかける。

「あなたの後ろ…何か居る？」

それは予想外の反応だったのだろう、一瞬目を見開いたラスティは、思い出したかのように呟いた。

「そつか……ティアマットには視えるんだな。……アーク、可視光線の透過率を維持したまま概念視へのステルスを解除してくれ」

そう言ったラスティの背後に現れたのは。人の上半身のシルエットを持つ半透明のナニカだった。周囲に何の反応も無い以上、他者には見えていないのだろう。

「コイツも紹介しとくよ、俺の使い魔のアークだ」

主人の紹介にあわせて、アークと呼ばれた存在がお辞儀をする。

その様子を、彼が現れた時とおなじように見つめるように見ていた。一般にいわれる”魔術師”という存在。彼らは使い魔として、何かしらこの世に存在する生命を従える事がある。狼や鳥といった動物や、サラマンダーやワイバーンといった魔獣。力量のあるものならアップサラスや精霊といった幻想種・世界種と呼ばれる超上生物を従える者さえいる。

ポリゴン体でかたどられたかのようなそれは、歪な輪郭をしている。ただ人の上半身を模しているとだけは分かった。だがそれが、果たして何のカテゴリに属するのか彼女には検討がつかない。

「……………見たこと無い種ね」

「あ、意外と驚かないんだな」

「確かに驚いたけど、人の使い魔に…驚いているようじゃダメだ

もの。使い魔を持つ魔術師は少なくないから」

正直相当驚いていたのだが、ラスティの発言にこれ幸いと便乗する。苦笑いを浮かべるラスティは、気付いているのかそれとも気付いてないのか分からなかった。

「まあ何にせよ、正体は秘密だつてことで」

「別に構わない」

相変わらず、対応は素っ気無い。

結局そのまま、ラスティとティアマツトは話し続けた。ラスティが話して、ティアマツトが素っ気無い対応で返すそういう形が大半だったが、後半になってくると次第に、ティアマツトの方から話しを持ちかけることもでてきた。ただ、それは殆どラスティへの質問だったが。

そしてしばらくすると、式が始まる様子が見受けられた。どうやら入学予定者が全員到着したようである。その周囲の変化に、ラスティが反応した。どうやらこの会話もここまでのようだった。

「おっと、もう時間か……俺はもう行くわ。じゃあな」

「ええ」

会話を交わすようになって、結局ティアマツトの素っ気無い態度は変わらない。

（まあでも、いいんじゃないか？）

そんな心の呟きを、使い魔にすらこぼすことなく、彼はその場を

後にした。

第三小節「夢に見ていた」

式が始まり、講堂の前方中央に備え付けられた巨大な教卓とも形容すべきものの上で、ラスティにはさして興味のないお偉い三の話というものが始まった。暇になりそうだと思ったラスティは、自身の使い魔と会話をすることにした。

「（アーク）」

特殊な契約を結んだ二者間で可能となる思念のみにおける会話、念話を行い、彼は自身の使い魔の名を呼ぶ。空気を媒体としないために、周囲に居る生徒たちにはその声が聞こえることは無い。傍から見たなら、熱心に話に耳を傾けているように見えるだろう。

「（はい）」

アークと呼ばれた、透明になっている彼の使い魔がその呼びかけに答えた。電子音的な響きを持った中性的な声、男とも女とも取れそうな声が脳内に響いた。ラスティの感じる限りにおいて、アークと呼ばれたその存在の気配が強くなる。

「（なあ、気づいてたか？ あいつ……………ティアマツトさ、俺たちが来たとき、周りに誰も居なかったよな）」

「（確かにそうですね。ですがマスター、わざわざ後ろから気配を殺して話しかけるのはいかなものかと思うのですが……………）」

「（まあいいじゃないか。そんな細かい事は気にする必要はないん

だぜ、これが」

「(いえいえ、そうではなく、話しかけるのもう少しタイミングを見計らった方が驚いたのではないかと私は思うのです)」

そんなことを言うアークの口調は、かなり真剣なものである。どうやらアークは悪戯好きなんだろうなと、主であるラスティは認識した。

「(……………ともかくだ、俺には彼女がああやって孤立していたように見えたのが気になる。何か分かるか?)」

「(……………いえ)」

正直人のこういったことに関して聡いとは思っていなかった。その答えに不満を持つことはなかった。アークがひどく残念そうな気配を感じさせるので、気にするなと彼なりに励ますと、とりあえずこの話題は保留することにした。

「(まあ、いいさ。きっとその内分かるだろう)」

そうして念話を切ると、始まった学院の説明に耳を傾けることにした。

????????????????

式が終わり、皆が開放された気分していると、教師のほうから通達があった。どうやら、今日は入学式ということで、まだこのパーティ形式の食事が続くらしい。この場で交流でも作って欲しいとでもいうのだろうか。だがそれは自由参加のようので、部屋に戻りたくない。

った生徒は寮に向かってもいいそうだ。講堂から出たあたりに、自分たちに割り振られた寮の表が出ているらしい。

「そういえばさっき言ってたな……二人で一部屋か、どんな奴がルームメイトになるのか楽しみだぜ」

そう言ったラスティの言葉に反応して、同じテーブルでサンドイツチを食べていた少年が質問してきた。その服装から、恐らく平民の出だと思われる。

「え、ここの寮って二人一部屋なんですか？」

これはさっき話していた筈のだが……そんなことを口には出さず、この（恐らく）ボーっとしていた少年にこのことについて説明することにした。

「……ああ、ここの寮は一応ベッドルームは個別に与えられるが、ベッドとタンスがあるだけの小さいスペースしか確保されてないんだ。机やら工房スペースやらは二人で共同で使用させることになっている。要は寝る意外は共同生活ってことだ。（自前で作れるなら）飯食ったり宿題やったりするのも、自然二人ですることになるんだろっつな」

そう説明してやると、何故か急に不安げな表情になった。何故だろうかと思うと、直後に紡がれた言葉でその不安の理由が分かった。

「も、もし貴族と平民が同じ部屋になったら大丈夫なんでしょうか？ その可能性を思うと少し不安なんですけども……」

「ああ、それなら大丈夫だ。ルームメイトは必ず貴族と平民とで組

ませられるらしいぞ？それに人員比でも一対一なんだから例外はないだろうな」

さも涼しげにそう語るラスティに、その少年はもう一つ疑問を投げかけた。

「あの……その何処が、大丈夫、なんですか？」

「いやほら、貴族（または平民）と一緒になるかならないか分からないという不安が解消されただろう？この情報によって寮に行つたときの心構えが出来るってわけだな、これが」

そう言うラスティの顔は、妙に晴れやかだった。

生徒一人一人に与えられた寝室。

城の荘厳な外観とは裏腹に質素に落ち着いた色でまとめられているが、簡素でありながら丁寧に作りこまれた少数の家具が、この学院の資金の豊富さを物語っているように感じられた。その、自身に割り当てられたベッドの上。そこで仰向けになりラスティは天井を眺めている。

「……………夢じゃ、無いんだな」

真つ直ぐ突き上げられた拳、その甲を見つめながらそう言った。そこには薄く光を放つ刻印が刻まれており、それがアークとの契約の証であることを示している。しばらくすると、その刻印は光を失い、後には普通の皮膚の色だけが残っている。

「……………アーク」

「はい」

ラストイの呼びかけに答えるその声は、先ほどとは違って高いものだった。ラストイが不思議に思っただけ確認しようとするより先に、いきなり空色の髪の少女が顔を覗き込んできた。

「つておおわあ！？！？ え！？ はい！？ 誰さお前！？ つうか何でさ！？」

突然現れた少女に、飛び上がり勢いよく後ずさる。ベッドに隣接した壁に勢いよく頭をぶつけてしまい、その場につづくまる。そんな彼の様子に、少女は悪戯が成功したコドモのような表情で嬉々として口を開いた。

「フフフ、アークですよ、マスター。私に性別の概念は存在しません。ですから人型に化身するときは、このように外見を任意の性別に設定できるのです。もっとも、髪色と目の色は変えられないのですが……………」

そういいながら、彼女はその姿を一瞬靄のようなもので包ませ、次の瞬間にはそこに少年が現れていた。そしてまた、その姿を少女のものに戻す。服装はゴシッククロリータとでも言うべきものだが、

生物学的に無いだろう髪色をみて納得したラスティは、ある事に思い至った。

その考えに思い至った彼は、その少女を睨みつける。

「くっ…………アーク、お前黙ってたな？ このタイミングで俺を驚かせる為に黙ってたがったな」

「いえいえ、そんな事はありません。マスターでしたらこのことをご存知だと思いましたので」

それでも面白げな表情を浮かべているアークを見て、彼は咎めるようにさらに強く睨んだが、そんなことを気にしない風にアークは口を開いた。良くも悪くも似たもの同士の主従なのかもしれない。

「マスター、私を呼んだという事は何かあったのですか？」

「……………まあ、いいさ。アーク、俺のバツクの中から、ノート一つ取ってくれ」

「……………どれでもよろしいのでしょうか？」

「あ、悪い。背負ったときに背中になる方にあるやつだ。一番端のやつだぞ？」

そう指示を出されたアークは、部屋の片隅にあるバツグ?????これは受付の係の生徒が運んでおいてくれたそうだ?????????の中から、一冊のノートを取り出す。

「えっと、コレでしょうか…マスターの持っているノートは不思議ですね。今までここまで綺麗なものは見たことが無いのですが……

……」

そう言いながらラスティにそれを手渡す。確かにそのノートは、使い込まれた形跡はあるものの、この世界で使われるどんな紙よりも白く、綺麗なものだった。そのことに、どこか自慢げに答えるラスティ。

「当たり前だ。俺が居たトコロは、こういう物を作り出すのが十八番だからな」

そのノートには、^{ニホンゴ}公用語^ニで題が記されていた。

設定資料・舞台となる物語・世界観

「……………自分で書いた」ノートを、こういうシチュエーションで見ることになると妙な気分になるな、これが」

そのノートを見つめる眼は、どこか郷愁を漂わせている。押し黙るアークに、ラスティは視線をやらずに語りかけた。

「世界を創ったのが神だというなら、人の手で書かれた物語の神はその人になるのだろうか、か。懐かしいな。どこかでそんなことを聞いて、こうして少しずつ世界観を作りこんでいった物語が昨日のことのようだよ。実際は……………どのくらいだったかな」

そうしてノートをめくっていく。そしてふと、あるページでその動きが止まった。ある部分を一心に見つめているその目の揺らぎに、傍らのアークは感情の動きを感じた。

「……………そっか」

何かに納得したように呟くラスティ。

その視線の先には、
‘水晶眼’、
そうかかっていた。

第四小節「もう慣れたと思っていたのに」(前書き)

ちょっと短めかもしれないです。

第四小節「もう慣れたと思っていたのに」

講堂からの拘束が解除された時点で、すぐにティアマットは寮に足を進めていた。顔を俯かせているせいで、その表情は見えない。ただ、何かに追われるように廊下を案内に沿って歩いていった。

大分広い間隔で、講堂とは違って生活観を感じられる落ち着いた褐色の廊下に並んだ扉の、目当ての番号が書かれた扉の前に立ち止まり、部屋に入る。

学生の身分に与えられるにはいささか豪華すぎるのではないかと思われる家具の数々。それが彼女を出迎えた。

そこは二人一部屋で割り振られている寮室で、ここには彼女？？？ティアマットの他に、ルームメイトがもう一人来る事になっていた。

だがそのもう一人はまだ来ていない。

未だ見ぬルームメイトを待つ事も無く、部屋の明かりをつけることもなく、彼女は部屋の奥に二つ並んだ扉の左側を開き、入った。

その一人一つ与えられていたその部屋？？？寝室は、最小限のスペースが確保されているだけの小さなものだった。だが飾り気の無いその部屋は、本来の広さよりも少しだけ、広く感じられた。

後ろ手に摘みを掴み、ゆっくりと捻る。重苦しい金属音をたて、それは鍵がかかったことを示した。その音を聞き届けると、その場に力なく座り込む。扉の前から動くこと無く、膝を抱え、頭をうずめる。

その髪が砂埃に汚れた靴にかかり汚れてしまいそうであることにも構わず、彼女はうずくまっていた。

備え付けられたベッドがすぐ側にあるにも関わらず、座ったままである。呼吸で僅かに上下する肩の動きが無ければ死んでいるのかと思えるほどに、今の彼女には生気が無かった。

一言、呟いた。

「……………紅い……………眼」

それは自身の右目のことなのだろう。その事に意識を向け、今日一日のことを、彼女は思い返す。寂しげに衣服の擦れる音が、暗い寝室に微かに響く。

「……………災厄……………」

すれ違う人々の様子を思い返す。自分の顔を見て、悲鳴をあげないまでも顔を強張らせ、近寄りたくないといわんばかりの生徒たち。その生徒たちは口々に似たような事を呟く。音は耳まで届かないものの、その唇の動きから、何と言っていたか読み取れてしまう。

‘災厄の目’、‘血塗られた目’、‘凶つ星の目’みな、このようなものだった。それを思って、懐かしむように呟く。かすれた声は、その部屋に響かせるには余りにも弱い。

「もう、慣れたと思ってたんだけど……………」

そう、そう思っていた。少なくともこれは今に始まった事ではなかったのだろう。世間において、紅い眼は不吉の象徴という意味合いを持っていた。

それを持つ人物は、場合によっては異端審問されかねないほど、紅い眼は大きな意味を持っていた。

それを、彼女は持っていた。

それに加え、彼女の眼は淡い光を放つように輝く。人に恐怖を抱

かせるように、淡く、暗く。魔術という神秘が存在するこの世界において、その光景は異様であった。いや、そういう神秘が存在するからこそ、その眼が光る光景に畏怖してしまうのだろう。

そんな彼女は、恐らく人々に忌避されるのは日常茶飯事ですらあった筈。だから尚の事、この十数年間で慣れてしまったと思っただのだ。

だがそれが、慣れではなかった事を思い知らされたのだ。

『ラステイハルト・ジーン』。今日出会った、不思議な少年。行き成り中空から現れたと思うと、彼女の顔を見るなり突然恥ずかしい事を言っただのだ。

『綺麗な眼だな』

今思うと、思わず赤面してしまうような台詞。彼自身は聞かれていないと思っっているようだが、彼女の読唇は容易にその唇の動きを読み取った。

綺麗などと、言われるのは初めてだった。汚らわしいや醜いなどの言葉を浴びせられることはあっても、この眼で賞賛を受けることは、生まれてからというものの初めてのことだった。

普通に接してくるその態度は、無知から来るものだと思っただのだ。見るからに異国の人。伝承が無くとも不思議では無い。だがそれは違うとも思えた。彼は目についての発言を避けていたのだ。それもかなり意図的に。それがこの眼のことを知っていることを証明することでは無いかも知れないが、それでもそう思えた。

「やっぱり……………」

どこかで期待していたのだろう、この眼を気にしないでいれる生活。ラステイという少年と出会ってから、それを期待する心が抑えきれなくなったのだろう。

でもだからこそ、周囲の人間が浴びせてくる言葉が辛かった。期待していたからこそ、今まで当然であった反応にショックを受けずにはいられなかった。

私は居てはいけないの？

私は生きてはいけないの？

私は……………

「……………悲しいな」

もうルームメイトと顔をあわせる勇氣も残っていない。もしその相手に拒絶されたら、避けられたら、怖がられたら……………それを確かめることは出来なかった。

逃げるように閉じこもった部屋の中で、弱弱しくすすり泣く声が聞こえていた

第五小節「朝の出来事」

私立ハルバルト学院の新生でもある、ゲルト・A・Fの朝は早い。領土持ちの貴族の長男として育った彼だが、いつも決まった時間になるとひとりで起きて歩き出す。

「…………ふああ〜、おはよう…………」

だがそれは、必ずしも目覚めが良い事とは一致しない。覚束無い足取りと、定まらない目の焦点は、彼が寝ぼけている事を如実にあらわしていた。そしてその事実を引き立てるように、癖の強そうな金髪は寝癖で氾濫を起こしている。

「…………みず…………ください」

そんな彼が毎日することは、起き抜けに水を一杯飲むこと。そうすることで毎日の目覚めを快適なものにしていた。

「はい、どうぞ」

手渡されたガラス質のコップから伝わる水の冷気は、起きたばかりの意識を刺激した。その水を、一気に飲み下す。喉を刺激する冷えた水は、一気に覚醒を促した。今日は良い一日になりそうだと思いながら、コップを

(…………あれ?)

ここに来てゲルトは、ようやくおかしい点に気付いた。

彼は今現在、学院の学生寮に居る。実家と違って侍従の居ないこの寮室には、このように水を持ってきて手渡してくれる人物など居

るはずがないのだ。

では誰が、手渡してくれたのだろうか。

恐る恐る振り返ると。そこには淡いそらいろの少女が居た。だが、その体は半透明で、後ろの景色が透けて見えてはいたのだが

(ひー!!ゆ、ゆっれ……………)

そこで彼の目の前は暗くなった。

「つたく、お前という奴は……初日の朝から何やってやがる!!」

腕を組み、全身から怒気を滲ませながら立つラスティハルトの前には、正座をさせられて涙目になっているアークの姿があった。その頭には、二段アイスクリームが鎮座している。

「うう……………すいません」

ことの始まりはこうだった。マスターにあらかじめ言われていた起床時間が近付いたところ、何やら寝ぼけた様子のゲルトが出てきたのだ。そして水を催促している。これは面白そうだと、わざわざアークは半透明の状態でゲルトに水を渡したのだ。そのアークを幽霊と勘違いした彼は卒倒。そして今に至る。

「ま、まあまあラスティさん。そこまで怒らなくても……………」

そう言いながら彼を宥めようとする金髪碧眼の少年は、ラスティ

のルームメイトとなるゲルト・アルカシアス・フィニエンス。隣国の武家貴族の出のようだが、そんなことを露にも感じさせない気性をしている。白のシャツに、茶のベストというそれなりに地味ないでたちも、彼の気性を表している。

「……そういや昨日、アークのこと教えるの忘れたまま寝ちまつたからなあ……アークだけじゃなくてこっちにも落ち度はあった（つつくアーク。面白そうなことするなら映像記録化するか視覚共有で俺にも見せるよ）」

「……！？……うう、すみません。（それならマスター、いくらなんでも拳骨は無いじゃないですか！？）」

「まあとにかく、済まなかった、ゲルト（体面だ、体面）」

「いえ、大丈夫ですよ。彼女の方も反省しているようですし」

裏で交わされている会話のことなど知らず、アルカシアはにこやかにその謝罪を受け入れる。その無垢ともいえる清々しさに、思わず内心冷や汗をラストイはかいていた。そんな彼の心情を知らず、アルカシアはアークを見て言う。

「それにしても……アークさんは精霊ですよ？　すごいなあ、僕なんて一生かかっても契約する自身なんて無いのに、化身級の精霊と契約できてるなんてすごいです！」

確かに、精霊と契約するには精霊からの何かしらの条件を満たして認めてもらわなくてはならない。しかもその条件は酷く厳しく、世界に存在する最下位級の精霊ですら人の高位の術者でも認めてもらわれない場合が殆どなのだ。精霊と契約していることはある種の

ステータスにもなる。

「けしんきゆう？ ……マスター、何ですかそれは」

聞きなれない‘人側での精霊の区分’に、首をかしげるアーク。その疑問に、ラスティは念話も交えて解説した。

「ああ、要は人基準での精霊の区分でな。人型に化身するまでの存在規模を持った精霊の事だ（お前から言う、第三階位あたりだ）」

そう言われたアークは、表情を強張らせる。途端に講義を返して来た。勿論、言っては拙いので念話でだが……

「（だ、第三階位！？ 私はそんな有象無象と一緒にされているのですか！？）」

「（落ち着けアーク。気持ちは分かるが頼むからせめて口には出さないでくれよ？ とりあえず愚痴なら聞いてやるから。） まあでも、そんな凄いことでもないよ。コイツと契約できたのも、ある種の偶然だったしな」

「そうなんですか……」

キラキラと目を輝かせアークを見つめるその表情に、小動物の印象を受けた。同い年の筈なのに、何故か年下のように見えてしまう。もっとも、向こうもラスティを年上のように接してはいたのだが。

「まあとりあえず、飯でも食いに行こうぜ。今日はクラスの発表もあるからな。とっとと済ませちまおうぜ」

「はい」

そう話題を切り上げたラスティは、着替えを済ませて朝食に行く事にした。

(これ以上話していると、なんか拙そうだったしな。)

そんなラスティの心情を、ゲルトは最後まで知る事は無かった。

「おお、ここが食堂か」

清潔さと高級さが感じられる白を基調とした内装に迎えられたその空間に、ラスティが感嘆の声をあげている。シンプルに直線で構成されたその施設、その見慣れないその光景に、彼は息を漏らしているのだが……隣のゲルトはそれでも無いようなところを見ると……やはり彼はブルジョワジーな生活をおくっていたと思われた。

皆の胃袋を預かるここ食堂。料理長を筆頭に、数人の部下(弟子)で構成された料理人団たちにより切り盛りされている。係りの人が動き易いように、置かれた円卓テーブルの間隔は広く、また数も多いため、その床面積はかなりのものであった。

今日は新入生たちが初めて朝食を食べにくるからだろうか、奥から忙しなく指示を出す声がしていた。いや、この学院の人数を考えるとそれは何時ものことなのかもしれない。

「総勢千五百人だっけ？ この学院の生徒数って」

自分達の食事の食券(料理は係りの人が持つてきてくれる)を持って数ある円卓テーブルの内一つに座り、そう疑問を呈したラスティ

イに、向かいに座ったゲルトが答えた。

「はい、そうですね。全三学年、各学年十クラス、各学級五十人ですから。他の学園に比べると、まだまだ規模は小さいようですね」

そう軽く言つてのけるゲルトに、苦笑いで返すラステイ。まあ確かにそうなんだろうなと答え、丁度来た食事に手をつけようとしたそのとき、背後から声をかける者がいた。

「お！ ダレかと思つたらゲルト坊じゃねえか！」

「あ、ハイスさん！ ハイスさんもこちらに入学してたんですか？」

どうやらゲルトと顔なじみの人物らしかった。振り返つてそのハイスと呼ばれた青年の方を振り返る。そこに立っていたその青年は、脱色され乱雑に切りそろえられた髪を無造作に下ろしていて、目に少し髪がかかっている。全体的に荒々しさを漂わせる雰囲気、ライダーズジャケットと思しき衣服に細身のパンツを履いているそのいでたちは、とてもゲルトの知り合いなどとは思えなかった。その意外な人物に、ラステイは思わず言葉を失う。

「おう。オレもどつか学院に行かなきゃなんねえ年つてんでどこにすつかなあつて思つてたらよ。こつちに面白そうなところがあつたんでオヤジに頼みこんだのさ。まさかお前さんもこつちに來てるとはなあ」

「でも本音は、親元から離れたかつたというのもあるんじゃないんですか？」

そう切り返すゲルトは、相変わらず丁寧な言葉使いのままだ。恐

らく誰に対してもそうなのだろう。そして、少々置いてけぼりであったラスティに気付いたゲルトが、ハイスに彼を紹介する。

「あ、そうだ。こちらは僕と同じルームになったラスティハルト・ジーンさんです」

「ラスティって呼んでくれ」

そう言われてラスティはハイスに軽く会釈をする。こちらをみたハイスは、機嫌良さげに答えた。

「おう！ オレはハイス・グイリティ・シェーネスヴェッターなんだ。オレのこと普通呼び捨てで……あと堅っ苦しいのは嫌いなんで砕けた調子でよろしくな。コイツにもよく言ってたんだが、どうにも直んねんだよなあ。あ、隣いいか？」

そう砕けた調子を求めてくるハイスに、ラスティは好感を持つ。身なりはアレだが、恐らく優しい人柄なのだろうと思え、ラスティは彼が求めたように接した。

「ああ、いいよ。確かにゲルトの口調は少々気になってたんだが……なるほど……ゲルトは誰に対してもそうだったのか」

ラスティが砕けた調子で話してくれたことに好感を持ったらしく、そのことにハイスが反応を示す。彼とは仲良くなれそうだと、その時ラスティは内心で思った。

「お！ 話が分かるやつでよかったぜ！ オレの周りのヤツはよ、オレが砕けた調子で話そうぜって言ってもなかなかそうしてくんなくてよお……まあオレんちが、'シェーネスヴェッター' だったのはわかるんだが、オレみたいな放蕩息子にまでへこへこしやがるん

だ。家族で付き合いもあつたゲルトの家で、フイニエンスコイツにはどうにか砕けさせようと思つたらさ………」

今まで饒舌に話していたその口調がとまる。そして言葉を紡ぐうとして固まつた表情が、少しずつ青ざめていった。その表情を維持したまま、ゆっくりとゲルトに向かい合い恐る恐る口を開いた。

「………な、なあゲルトよお………おまえさんが居るってこたあ………まさか、あクソアマの女、も居やがるのk………」

その言葉は最後まで続かなかつた。またもや背後からかけられた声でハイスがフリーズしてしまつたからである。

「あら？ 私がどうかしましたか？」

その声から、女性であることが推測できた。だがその声は不気味なまでに感情を抑えられている。その裏に煮えたぎる怒りを感じた更にハイスが青ざめていき、隣にいるラスティには彼の顔に冷や汗が流れるのをはつきりと確認できた。部外者であるラスティですら、その圧力に屈しそうであるのだから、直接それを向けられたハイスは一体何を感じているのであろう。………少なくとも心地の良いものではないことは確かだ。

「それはともかく、兄さん、隣、失礼します」

そう言いながら、回り込んでゲルトの隣に座り込んだ少女を見て、ラスティは唾然とした。周囲に気を配つてみると、その場の大多数が彼女に視線を向けていたようであつた。

確かに、彼女の容姿を見たら目を奪われずにはいられないだろう。……その彼女の容姿は、周囲の興味を引くのに十二分の理由があつ

た。それがゲルトと血縁・・・しかも二親等だとは誰も思っまい。

「クツ……………テメエ、まさかここに来てるとはな……………」

「あら？ 兄さんを見た時に悟りませんでしたの？ 双子の妹’である私が、兄と同じ学院に入学することは当然でありましょう？」

‘エメラルド’、そう形容すべきであった。生物学を完全に無視した宝石光沢を持つ明るい緑の髪を、恐らく昨日会ったティアマツトほどに長く伸ばし、それを髪留めでまとめている。その尋常とは思えない髪色は、しかし人口では無いと確信できる独特の光沢を放っていた。黒に濃緑色の入った男装風の上は、彼女の引き立てるように存在していた。

金髪のゲルトと、エメラルドの彼女とは血縁だとは思えないという見解が周囲を占めていた。ただ、ラスティだけはそのことに納得をしていた。

「まさか、‘もう一人’居たなんてな」

そういったラスティの言葉が聞こえてか否か、その存在に気付くと、‘兄’と呼んだゲルトに向かって質問した。先ほどまでの口調はなりをひそめている。

「兄さん？ こちらの方は何方？」

「あ、うん。彼は僕のルームメイトのラスティハルト・ジーンさん。いい人だよ」

「そうですか。……………初めまして、ラスティハルトさん。兄が世話になっていきます。私はゲルト・A・フィニエンスの双子の妹のポラ

リス・エ・フィニエンスと申します」

非常に丁寧な物腰で会釈をするポラリスと名乗った少女。その容姿への驚きがまだ冷めていなかったが、ラスティは固まることなく対応した。

正直、ゲルトの数倍、武家としての雰囲気が出ている。威圧感と言うほどでもないが、独特な雰囲気を持っていた。

「今紹介してもらったがラスティハルト・ジーン。俺の名前はちょっと長いのでできればラスティって呼んでもらえると有難い」

ただそう呼んでくれと言っただけでは呼んでくれそうになかった。どこと無くフルネームで言われるのが好きではないというニユアンスにとれるように、ラスティは説明した。

「そうですか。わかりました。ところで初対面でいきなり失礼とは思いますが、ラスティさん。貴方、何か、連れていらっしゃるのでしょうか？」

その発言に、別の意味で驚愕するラスティと、‘アーク’。事情の分かるゲルトは感心した様子で、ハイスの方は首を傾げている。

「うわあ、ポラリス、流石だなあ……………」

「あ？ おい、ちょっと待ってくれ、オレは事情が掴めないんだが」

「まさかとは思ったが……………」

三者三様の反応を示す彼らに首を傾げるポラリス。そんな彼女に、空気を読んだと思われるゲルトが答えた。

「その質問は、後で時間があつたら説明するよ。ほら、ポラリス、ルームメイトを待たせてるんだろっ？」

質問に答えてくれなかったことに若干の不満の色を覗かせていたが、納得したように頷いて、席を立った。

「まあ、分かりましたわ。でしたら兄さん。今日の夕食の時にでもまた」

流石に兄妹には普通の口調で話すのだろう。それでも育ちの良さを感じさせる口調だが、彼女はそういつて待たせているルームメイトの元に帰って行った。それを見届けて、緊張が解けたようにハイスが崩れ落ちた。

「っはあく〜。やっと行つたぜ。……………ったく、苦手なんだよあの女……………」

そのことは直接彼の口から言われずとも察することができた。あえて指摘することは無かったが、それよりも今は優先すべきことが彼らにはあつた。

「って、こうしてる間にも、貴重な飯の時間が!？」

そんなラスティの深刻そうな発言を受けて、他二人は振り返って食堂に備え付けられた時計を見た。彼らにはもう殆ど時間が残されていない。

「マ、マズイぞ……………」

「これは急がないといけませんね。」

もうすでにラスティは食事を掻き込み始めていた。そんな彼に合わせるように、二人も食事を掻き込み始める。

喉に詰まりそうになった肉を水で流し込みながら、ゲルトはふと思った。

「（そういえば、きっとポラリスは食事をすませてから此処に来たんだろっな）」

それから彼らが食べ終わったのは、教室への移動完了と決められた時間の、約四分前のことだった。

第六小節「それは遅ればせの」

朝日の差し込む寝室に、けたたましい金属音が鳴り響く。思わず耳を塞ぎたくなってしまいそうな音量の中、ベッドの上で毛布に包まっていた少女は、その中からゆっくりと音源に向け手を伸ばす。その中から覗く髪は、朝日を受けて鈍銀に輝いている。

「うっ、あともう少し……って!!」

勢いよく意識を覚醒させ、飛び跳ねるように立ち上がる。同時に跳ね上がった毛布が、軽い音をたてて床に落下した。着込んだネグリジェはズレ、肩口までの長さのアッシュブロンドが、所々寝癖で跳ねている。

「拙い、まずい、マズイ!!」

驚掴んだその据え置きの時計が示した時刻は、朝食の終了まで残り十五分。その事実にも、彼女は必死に寝起きの頭脳を回転させた。着替えを高速で済ませ、寝癖を手製の道具で直し、校章をつける。ここまでおよそ三分。

「食堂まで、たぶん、十分……間に合ええええ!!」

年頃の少女らしからぬ雄たけびをあげながら、誰も居ない寮を後にする。

色の抑えられたステンドグラスから、角度の浅い朝の日差しが差し込んでいる。硬質な質感の垂直様式の廊下に、わずかに柔らかさが演出された。その中に、黒い髪が揺れている。

「ラステイハルト・ジーン……………」

その少女ティアマトは、昨日であった青年の名を呟いた。何の偶然があつてか、彼女は彼と同じクラスとなっていたのだ。

人が集まる前に手早く朝食を済ませた彼女は、人気の無い自身のクラス……………一年四組に向かった。それが彼女に割り当てられた居場所だった。

学級エリアに近づくにつれ、建築様式が変化してくる。足音が変わ化したことに気付くまで彼女はそのことに意識が向くことは無かったが、その音が変わった瞬間、彼女は足元に目を向けた。

「木？」

その建造物には木材が使われていた。普通、ここまでの規模の建造物は金属や石材でつくられる。扉などは話は別だが、このような大規模の建築では木材が使われることは有り得なかった。普通は強度に限界が来てしまうからである。

彼女の乏しい知識ではその問題への解答を導き出すことは出来なかった。保留することにした。もとより関係の無いことだからと。

ごく普通（中央エリアに比べだが）の内装の教室には、五席一列で十列の机たちが並んでいる。横長の空間の部屋の前方には、教壇と思われるものがあり、その後ろには濃緑色の壁が広がっている。

そこには大きく白い文字が書かれていた。

「来た奴から自由に席に座っている~~~~~BY担任」

その文字を見て、ティアマツトは若干憂鬱な気分になる。

??
??

結論からいくと、間に合わなかった。もてる体力の全てを尽くし、アークに記憶させた見取り図から最短ルートを割り出し、果てには少々魔術の恩恵にもあずかっておきながら、三人は間に合うことがなかった。

彼らの教室となるところの前には、彼らの前に立ちふさがるように男性が立ちふさがっていた。恐らく担任教師だと思われる。

「ほう……………お前等……………初日から遅刻とはいい度胸しているじゃないか。」

焦げた赤茶の髪を後ろに流し、その力の籠った視線とローブを纏った上からでも分かる鍛え上げられた肉体が、彼らを威圧した。その威圧に耐えかねたように、ハイスが弁明を試みる。

「ち、違つんです、先生！！ 緑のクソあま????????????????
?」

その言葉は最後まで続かなかった。突如飛来した銀色の何かが、彼の後頭部に直撃したからである。

そのまま崩れ落ちるハイス。周囲の三人は何が起こったのか理解できず、言葉を失う。

「い、一体何が……………」

その時アークから、視覚共有のアクセスがラスティにはいった。その脳内には、彼らの隣の教室の扉が、少しだけ開いている映像が映っていた。アークが興奮気味に解説する。

「席から立つことなく、風の精密制御・計算により風に乗せたシルバードリットを視認していない対象に直撃させる……………これをできるのが精霊にでもどれだけいることが……………」

どうやら、ハイスの近くに転がっている銀色の物体は、ポラリスによって放たれたものようだった。ラスティが隣を見てみると、ゲルトの引きつった笑いが見える。どうやら彼は犯人はわかっているらしい。……………なるほど、ハイスが彼女を苦手にしているのも分かる。クソアマと言いかけた果てにこうなったことには同情しないが。

むしろ、このことで話が有耶無耶になったことに感謝をしたいくらいであった。

??
??

教師が一時不在になったからだろう、教室内に居た生徒たちは思いにおしゃべりを始めていた。その方が遅れたことに注目されすぎないからいいかなと、ラスティは内心思う。そして教師に連れられて、彼らは教室の後ろから入った。そして内装をみたラスティが、何かに気付いたように壁に手を一瞬あてた。

「へえ……………これはすごいな」

そう、ラステイはそう呟いた。その明るい色目の木の壁を興味深そうに見るラステイの様子に気付いた教師が、彼に話しかける。183cmある彼の身長より大分高い位置から、その視線は見下ろしていた。

「お、ラステイハルト。お前はこれがわかるのか？」

「はい。針葉樹の木材で、表層に薬品が塗られず簡単な魔法処理のみでこの明るい色を保つということは、高濃度の空气中魔力で育ったマツの類だと……………それもここまで白が強いということは北方王^{ルキム}領樹林からの輸送品ですね。いくら対魔力の強い木材だからって、ここまで使うと経費は馬鹿にならなかったでしょうに……………」

そう言う彼の様子を、教師は感心した様子で、ゲルトとハイスは啞然として、ティアマツトにだけ見えていたアークは誇らしげにそれぞれみていた。そんな彼らの様子には構わず、彼は続ける。その様子から、何か解析をしている風だとは見て取れてはいた。

「……………それに、分かりにくいけど何か奇妙な工程がある……………六角形？ ああ、‘ハニカム構造’か！ 一つ一つにルーンが……………十二の二乗、百四十四文字周期で同じ文字列で刻まれていますね、これは。最初の六文字で分かります。有名な硬化刻印ですね……………あたってます……………か？」

振り返ったラステイの視界には、彼を見つめて啞然としている生徒たちの姿が広がっていた。いつの間にか喧騒も止んでいる。

やってしまったというような表情をする彼に、面白いモノを見た
というような教師が沈黙を破った。

「正解だ、ラスティハルト・ジーン。驚いたな。まさか初見でこの
構造を見抜くなんてな……大抵のやつはここに木材が使われる理
由すら分らずに聞きに来るやつまで居るんだぞ？」

その言葉に、困ったよう、恥ずかしさを隠すように彼は苦笑いで
返す。まあとりあえず、席に座りましようと言ってその場を誤魔化
す。どうも、意外と恥ずかしがりやな面があるようだった。

そしてそこから逃げるように空いている席に向かって歩き、四席
空いていた席の内の一つに腰を落ち着ける。そんな彼の行動にも、
周囲の人間は驚いていたようだった。

それは、窓側から二番目の列の一番後ろ。最後まで空くものと思
われていた席だった。

第七小節「空くはずだったそこは」

自身の隣に座った‘彼’のことが気になってしまふ。視線を外そうにもついつい視線を向けてしまふ……そんな状態にティアマツト・マキナは陥っていた。

????????

ティアマツトは教室に来るなり最も後ろの窓側の席に座り、何かをする事もなく、外の景色に眼を向けていた。碧の葉で遠くの視界を埋め尽くす木々と、やや風のあるせいか流れが速く見える雲が、何となく春を感じさせる。

後から少しづつ来る生徒たちは、各々好きな場所に席をとり、以前からの友人と思われる相手や、ルームメイト等と話始める。ティアマツトに意識を向ける者は居なかった。

それを寂しいなどとは思わない。寧ろ感心を向けなくてくれとさえ思う。自身に向けられる、恐怖と侮蔑の視線よりならば、無視であつたほうがよほど気が楽だと思えた。

だからだろうか。ラストイハルトと名乗った彼のことが一瞬頭を過ぎた。今まで生きてきて、この眼のことを悪く言わないで接してきた人間は居ないといえばそうではない。だが‘綺麗’などと言つた人物は一人も居なかった。

眼を気にするなという事はあつても、あえて意図的にその話題を避けたのもある意味新鮮だった。打算も下心も無く、ただ知り合っ

たからと、そんな理由で話しかけてきた。
そして何故なのか、そんな彼の行動を疑う気持ちには、なれなかつた。

唯一、興味が持てたとと言っても過言ではない。

私の眼のことに気付いた人たちは、意図的に視線をそむけて来る。私の近くの席だって、しぶしぶといった感じで、恐る恐るといったようすで、そうして不必要なほどに恐れながら席に着くのだ。

未だ、私の席の隣には誰も居ない。

あの人だったら、ここに座ってくれるのかな？

何でも無い風なようすで、よろしくと、そう言ってくれるのかな？

「ううん、止めておこう……………」

そうして、そんな思考を断ち切った。

そうでなかった時に、悲しさで潰れてしまいそうだから。

??
????????????

そう、期待していなかったと言えば嘘になる。だから余計、そのことが現実になって彼女は動揺していた。

「よ、同じクラスみたいだな。よろしく」

「え……………うん」

そういつて極当たり前のように私の隣に座り、先ほど饒舌に木材について解説していたことを後悔しているように頭を抱え始めた彼

に、素っ気無い返事しか返せなかった自身を少し悔やんだ。そのことで気を悪くする人では無いことは昨日のことであって、どうしてか、気になってしまった。返事を気にしたことなど初めてだった。

「くううう……おい、ゲルト、ハイス、何してるんだ。こっち来いよ」

そう言われたゲルトとハイスは、ラストイに促されるように、それぞれ彼の前と隣に座った。残り一つ、ティアマットの前の席を残して埋まった。それを見て、教師が口を開く。

「あ？　なんだ、まだ誰かきて」

その時勢いよく、前の方の扉が開いた。

「すみません！！　おくれましたあ！！！！」

そこに勢いよく、銀髪青眼????このあたりでは比較的少ない????で、快活な印象を与える浅黒い肌の少女が飛び込んで来た。

??

ひとまず収まった朝の騒動。教師の男性が教団に立ち、皆が静まる。この時ようやく彼は、周辺に気を配る余裕ができた。

「やっぱ木はいいよなあ。前を思い出す」

木材で囲まれたその空間、その色合いに、ラスティは郷愁を感じていた。彼が知っている‘ソレ’よりははるかに広いが、それでも思い出さずには居られなかったようだ。

そんな感傷に浸っているうちに、教壇にたった教師は黒板に文字を書き出していた。

A l b a ・ A r c h i n a m

「そういえばまだ、オレの名前を話してなかったな。　オレの名前はアルバ、アルバ・アーキナムだ」

名前を書き終えた教師？？？アルバ先生は、身を翻す。先ほどは分からなかったが、少々タレ気味の眼が可愛げに見えてしまう、が、少々強面の先生だった。

面倒くさいという心情が伺えるその表情に変わらず、名前だけの自己紹介で終わらせる。とつととやることやっちまおつと、そう意気込んで生徒達の方に向き直った。そして……

「さて、まず最初にやることだが……大体のやつは察していると思う。まずは委員長を決めるぞ！」

その瞬間。静かだったクラスがざわめきはじめる。まだお互いの自己紹介すらしていないこの状況下で委員長を決めようというアルバ先生の発言に、否定的にはないが驚いた。

「（まで、普通……こんな早いっけ？　まずは教科説明とかじゃないのか？　自己紹介とかは無しか？）」

そう、妙に動揺し始めたラスティを置いていくように、委員長を決定する話し合いが行われた。そんな空気に、どこと無く良くないことが訪れるような気配を感じた。

「自薦、他薦、どっちでもいいぞ？ オレとしては、早く決まるなら誰でもいい」

そうアルバ先生が言い放つと同時に、ハイスが勢いよく手を挙げる。そんな彼の行動に方眉を吊り上げた先生だったが、気にする事無く指名した。

発言権の与えられた彼は、よく通る声でこう発言。

「オレはラスティハルトを推薦します！！」

「いや、なんでさあ！？」

そんな本人の講義の声も軽く流され、その理由をハイスは問われる。

「彼は、この中の誰もが気付かなかったこの建物のすごさを見抜いてました。魔術だけではありませんが、ここがそういったものを中心に学ぶ以上、その実力の一部を披露した彼を推薦したいと思いません。またこのクラスは、それぞれの人間性を考慮できるほどに相互いをよく知っているということもないので、実力の面からの判断とさせていただきました」

その不良ともとれる容姿からは思いもよらないまともな発言。やはり貴族という事でそれなりの教育を受けてきたのだろう。普段もそうしていれば両親に怒られることも無いでしょうにというゲルトの呟きが聞こえる。

そんな彼の自信に満ちた発言に、何故か周囲も納得したかのよう

な雰囲気を見せ始めた。やはり、先ほどのラスティの行動が原因の一つでもあるのだろう。

そうして、彼の発言が終わる。彼は、何かをやり遂げたかのような清々しい笑顔を浮かべていた。そんなさわやかな雰囲気のまま、ラスティに向かって小さな声で告げる。これから起こることが楽しみで仕方が無いという風な様子だ。

「いやあ、アンタが委員長の方が面白いって思ってたよお」

発言が終了するなり小さな声でそう言ってくる彼は、周囲の空気も、ラスティが委員長の方向で纏まってきているようでもあった。

やはり、彼が先ほど披露した知識の断片と、その後のハイスの発言が彼らを納得させたそうだ。

もう逃れようがなさそうな事態に陥ったことに、机に突っ伏すラスティ。そんな彼に、アークは嬉しそうな声色で念話をつなげて来た。

「（凄いじゃないですか、マスター！ クラスのリーダーですよ！）」

そんなアークに一言言う気力も、この時のラスティには残されていなかった・・・ただ突っ伏したまま呻くだけである。

第八小節「こころふくらませ」

短い十分の休憩の時間。

教室の窓側から二列目の一番後ろの席、ラストイハルトの席となつたそこには、本人が突つ伏していた。その体勢のまま、呻くように呟く。

「くそ、何故だ、何故こんなことに……………」

結局のところ、彼の必死の抵抗もむなしく、彼は満場一致で委員長にされてしまった。半ば無理矢理の形で引き受けさせられたが、とりあえず諦めてその職をこなすことにしたようだ。

彼の前の席に座っているゲルトが、後ろに振り返って恨めしげに彼を見ている。

「だからって僕を巻き込むことは無いと思います。」

その次に決めることになった副委員長の役職は、選抜の権限を与えられたラストイが即座にゲルトを推薦していた。何でハイスじゃないのかとゲルトに問われたが、働いてくれそうにないからと一蹴、否応なしにさせられることとなった。

そんな彼らに、ラストイの右隣に座るハイスはまるで自分にはまったく関係の無いことのように発言をした。

「ま、諦めるや、やばくなったらオレも手伝ってやるからよ？」

「……………お願いしますよ？」

だが元はといえば彼が発端なのだと、そう恨めしげな視線をハイ

スに移したのをラスティはちらりと見ながら思った。

謀らずとも委員長と副委員長となった生徒は同じ寮室の生徒同士である。これなら都合がいいときもあるのだらうなと……………今更と
いうものではあったが……………。

そんな他愛も無い会話をしているうちに、鐘がなり、アルバ先生が入ってきた。授業の時間である。

「起立！」

号令をするのは、ここでは委員長の仕事であつた。鐘が鳴ると同時に起き上がったラスティが、元気良く声を上げるとそれにあわせて皆は立ち上がった。

「礼！！ 着席」

??
?????????

「さて、今日やることだが、本格的な授業はまだやらない。まあ知
つてる奴が大半だと思つが、今日はここでお前等がこれから勉強し
ていくこと……………その中の魔術についてから話させてもらつ。」

そうアルバ先生が告げると、赤褐色のローブの懐から四色の鉱物
を取り出し、皆に掲げて見せた。透き通つたその色合いは、どこか
宝石を思わせる。

「魔石……………まあ皆まで言わんでもわかるだらうが、コイツは
魔術の使用に欠かせない重要な触媒だな」

そしてわずかに唇を動かし、何事かを告げる、すると教壇の上に、

魔方陣らしき図形が現れた。その上に、手から離れた四色の「魔石」達が下方から力をつけたかのように浮かびあがる。

「赤」

「青」

「黄」

「緑」

告げた言葉の順に、それぞれの魔石たちが光を放った。それをじつと見つめる生徒達に、先生は説明を続けた。

「これらはそれぞれ、「火」「水」「土」「風」を象徴すると言われている。魔術はこれら魔石なしには発現できない。まあ、例外はあるんだがな。」

「これら魔術………が生み出す「幻想」………これは様々な用途で使われているな。魔術は才能に左右されることはあっても、誰にも使用は可能な力だ。だがこれは、それなりに学が無ければならない。お前らには、地理歴史といったもののほかに、こういった魔術のことについても学んでもらう。」

ゆくゆくは国を支える人材としてな、と最後に先生は付け足した。それと同時に、教壇の上の陣は消え、魔石が先生の手のひらの上に落ちる。

「（お、アルバ先生、手袋してるぜ）」

魔石が落ちた手のひらには、手袋がはめられていることに今更ながらラスティは気付いた。そしてそのことに気が付くと同時に、目だけで左に視線を向ける。

その視線の先には、頬杖を着きながらもしつかりと話を聞いているティアマットの姿があった。そしてその彼女の手にも、黒い手袋がはめられている。

「（そっぴいえば、ティアマットも手袋してたんだもんな。……………なんでだろう？）」

そんな一瞬の疑問をとりあえず保留させておき、視線を教壇に戻した。

「魔術において大切な要素として、魔石・式・詠語の三つが代表的なものとして挙げられるな。」

魔石は、それ自体が魔術の力の根源となっているが、こいつは石のカットの仕方や加工の手順の違いで違った性質を見せることもある。同じ魔術でも、魔石の加工によっては違ったものとなることもあるぐらいだ。こういった事柄を、‘魔石工学’として学んでもらう。」

「式、A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z。これらの文字と図形の組み合わせで魔術の骨組みにもなる部分だ。これらのことを、‘式学’として学んでもらう。」

「詠語、精霊たちの言葉とされるオレたちとはまるで毛色が違う言葉で、魔術の詠唱はこいつ無しには出来ない。そのまま、‘詠語学’」

「あと、魔術実践については、一年生の内は基本的なものを全属性……………二年後半と三年では、選択制でどれか1、2つ学んでもらうことにもなってる。」

「あと、選択制で強制では無い教科もあるが……面倒だな……」

そう呟きながらも、しつかりと説明をするアルバ先生だった。それを聞いていたうちに、気分が徐々に高揚してくるようにラスティは思った。未知の生活に心を膨らませ、彼は鐘が鳴るまで熱心に聞き入っていた。

・ ・ ・ ・ ・

まだ初日の彼らの日程は、まだそれほど大変だとは言えない。各教科については簡単すぎる説明があっただけで、課題すらまだ出されていない。

午後からは校内見学の時間として、生徒一人一人にパンフレットのようなものが渡され、学院内を自主的に見学することとなっている。自分たちのクラブ活動の宣伝が許されていることもあり、上級生たちはこぞって下級生たちの勧誘に乗り出している。

アークに校内の構造を全て記録させているため、既に構造の把握をする必要のないラスティは、どう行動をしようか決めかねていた。

「どうすっかなあ……勧誘の先輩たちに絡まれてあんま色々見て回れなさそうだし……」

「どうするのですか？ 確かに構造自体は問題ないでしょうが、そ

れだけでは分からない情報というものもあるのですよ?」

すでに皆が教室を出払っていたため、教室には彼らのほかには誰も居ない。そのためアークは姿を現すことはしないまでも、肉声(?)で会話をしていた。退屈そうに頬杖をつき、パンフレットを眠そうな目で見ているラスティにアークは進言する。今のアークは少年の姿でいるようだ。声に若干の変化が見られる。

アークの進言にも興味なさ気な彼は、探索などよりもしたいことがあった。

「なあ、アークよお……………そういえば俺、昨日ずっとノート読んであんまり寝てなかったんだよな……………さっきまでは興奮アドレナリンでどうにかなってたが……………流石に眠くなってきた。何処か昼寝によさそうなどころないか?」

どうやら睡眠欲が最優先らしい。仕方なくアークは、言われたとおり場所に提案する。

「本棟の屋上などはどうでしょう? あそこなら人は来ないのでと思います」

「お、そいつはいい。確かにあそこなら人は来ないな……………よし、直行するぞ」

先ほどまでの無気力な様子とは打って変わって意気込んだ表情を見せた彼は、意気揚々と歩き出す。姿を現さないアークの、そんなに元気があるのなら……………という呟きは、先にすすんでしまった主には聞こえていなかった。

??

本棟屋上。敷地内の建造物の中で最も高い本棟の屋上は、それに広い空間となっている。なんの装飾のされていない殺風景な様相に、予備の資材と思しきものが置かれているその様子からは、屋根のない物置のようなものなのだろうかと思われる。

乾燥した気候の空気は春先の強めの風と相まって肌に冷たい感触をもたらす。防風にと簡易結界をわざわざ張ってくれるアークのような存在が居なければ、誰も好き好んでこのような場所には来ないだろう。

そんな睡眠には持って来いの環境に気を良くしたラスティは、それに適した寝場所を探し始める。

「それにしてもマスター。こんなに食事を買い込んで何をするつもりなのですか？」

誰も来ることは無いだろうということで、アークは実体化している。少年の姿のその精霊の手には、大きく膨らんだ袋がさげられていた。

ここに来るということで、後で夕食はゲルトとハイスでも呼んでここで食おうと思いついたらしいラスティが、あらかじめ買い込んだものだった。

「何って……あいつ等呼んで此処で飯食おうってただけって言うたろ？ まあ、どうも貴族っぽいあの微妙に堅苦しい雰囲気ではなんか飯が味わえなくて……というのが本音だ」

今朝のあの慌しい食事に堅苦しいも何もあつたものでは無いのはと、つい突っ込みかけたアークだったが、あれが普通に食事を取っていたならばそう（堅苦しく）なったのかと思ひ至り、言う事を変えた。

「あのお二人が断るとは思わなかったのですか？」

「その時はその時、俺とお前で食い尽くすのさ」

「確かに私は、必要が無いといえど食べる事はできますが……………」

とほど堅苦しい会話の少ない貴族然とした食事が嫌いらしい。暇を見ては念話で交信してきていた今日一日の主の様子を見て思ったが、どうやら彼は話すという事が好きなようだった。

そうこうしているうちに、ラストイは寢床に最適な場所を探し出す。そこに寝そべると、結界を維持してくれているアークに向けて言った。その視線は流れる雲を見ている。

「頃合になったら起こしてくれ」

そういつてすぐに目を閉じる。睡眠を欲していたその意識は、了解の返事をするアークの声を遠くに聞き届けると、すぐに夢の世界に落ちていった。

Ark's memo「登場人物」

傍らで寝ている自身の主を柔らかな視線で見守りながら、アークはその隣に腰をおろしていた。その髪の色は空と重なるようで、アークの精霊としての性質を物語っているようでもあった。

ラスティを見つめたまま、優しい声が発せられる。

「全く……マスターにも困ったものです。本当に自身に正直なのですから」

そついいながらも、表情は微笑んだままであった。そんなアークの様子は、主に寄せる愛情にも近い忠誠を伺わせるのに十分だった。主から視線を外し、主が直前まで見上げていた空を見る。その心は、彼と出会った時に飛んでいた。

まだ彼と契約してからの期間は二日でしか無い。

長い付き合いのように話し、慣れたようにアークを使役するラスティであったが、その関係はまだつながれたばかりでしか無い。

ティアマツトと別れ町に向かい歩んでいた彼の前に姿を現し、契約を求めたのだ。その時の台詞を、イントネーションも完璧に覚えている。

『……………貴方は、もしか……………?』

『俺か?……………俺の名前は^{ラスティハルト}Lastiehalt・Xeen

（「ジン」）だ』

出会い頭の短い質問と、答えられた名前を聞いて化身の身が震わされたのは今でもはっきりと覚えていた。

‘記録’する必要性を感じないほどに、その時の情景は鮮明に‘記憶’に残っている。

直後に求められた契約に、戸惑いながらも何の疑問を口にするこ
と無く答えるように差し出された手。

震えそうな化身の身を抑え、その手を握った自分。
触れるだけで流れ込むその存在の有り様。

存在規模は人の範疇でありながら、微細なソレを全く感じさせない。
い。

精霊の我が身が直感的に感じた、その甘美な有り様に…………

……………惚れ、憧れ、敬い……………気付けば完全な主従契約を結んで
いた。

それが済んだ時に、少し驚いた表情をしていた主となった彼。

そんな回想に浸っているうちに、自身の口元が笑っているのを感じた。

だがそれを可笑しいとは思わない。

世界種と呼ばれる精霊のその中でも上位に位置する自身が、実際にその存在に触れ、感じ、認めた主を想い、仕えることを可笑しいとは思わない。

「そつえば……………メモ’なるものをマスターは書いていましたね」

回想に浸っていたアークが記憶の中で気になったのが、主が書い

ていた自身に起こった出来事やちよつとした事を書き込むだけのメモ。何を書いているかはアークは見えていない（見せて欲しいと言えば見せてくれそうなのだが）が、何かを書き記すという行為を真似してみたいともアークは思った。

「ですが……………何を書きましようか……………」

何処から取り出したか、手帳サイズのノートと筆記用具をいつの間にか手に握っていたアークだったが、いざ書こうというときに何を書こうか思い浮かばない。

「……………そうだ、今までマスターが出会った方々で、これから色々関わってくるでしょう人物の‘メモ’を書くことにしましょう！」

そう意気込んだアークは、なれない手書きに必死になりながらメモを書き始めた。

『アークのメモ・人物』

「ラストイハルト Lastiehalt・ジーンXeen」

・敬愛する私のマスター。黒い髪に黒い目で、細身で背の高い自慢の主です！！

・誰かと会話するのが好きなようで、暇になれば私に念話をよく繋いでくれます。クラスの委員長に推薦されたそうですが、マスターならば出来ると思われています、頑張ってください！

・まだであって二日目なので、まだマスターのことは詳しく知りませんが、その人生一生御仕えするでしょう私は、少しずつマスターの事を知って行きたいと思えます。

・片方が紅い眼のティアマツトという少女のことを気にかけているようですが、何故なのかはまだ分かりません。恋愛感情では無いようですが、気になる次第です。

・XEENを名乗っていらつしやるのですが、これでは世界種たちに自分のことをばらしているようなものだと理解しているのでしょうか？ ひよっとすると分かってないかもしれせん。

・この書き方は箇条書きというそうです（あれ？ ひよっとするとこれは書かなくても良かったかも知れせん）

・名前の意味は教えていただけませんでした

「ティアマツトTiamat・マキナMaxina」

・ここに来たマスターが一番最初に出会った少女だそうです。羨ましいです。黒い髪はマスターとおそろいです。羨ましいです。私ももう少し化身が上手ければ、マスターとおそろいの髪色に出来たのかもしれない・・・今ほどこれを恨んだことはありません。もう一度言います……いや書きます、羨ましいです。

・ 紅い眼は魔石のように輝く時があるのですが、これは何故なのでしょう？ マスターは知っているようですが、まだ私には教えて下さいません。

・ どうやら他の皆様には避けられているようです。マスター以外の方と言葉を交わしているのを見たことはありません。眼と関係があるようです。

・ 私が化身していないのにも関わらず存在に気付きました。かなりのつわものなのでしょうか。あるいは特殊な事情があるのでしょうか。

・ 名前は、どうやらどこかの神話に出てくる女神さんのものと同じらしいです。きっとそれに意味があるのでしょうか。

「ゲルト Geild・アルカシアス Arcasius・フィンニクス Finiens」

・ マスターと一緒にルームになった（消された跡があるが、よく見ると、虐め甲斐が、と書かれている）可愛げのある少年です。

・ 武家貴族の出なそうなのですが、とてもそうには思えません。（消された跡があるが、よく見ると、弱、と書かれている）優しそうな方です。

・ 双子の妹がいるのですが、似ていません。

・ 地味です（消されかかった跡があるが、どうやら消すのを途中でやめたらしい）きっと他の皆様方の中に埋もれてしまっただけです。

・名前の意味は‘おカネ’だそうです……………巻上げましょうか？

「Hais・Guillity・Schenesvetter」
ハイス グイリテイ シエーネスウエッター

・ゲルトさんとお知り合いであつたらしい方です。ご自分の髪を脱色されているようです。

・荒々しくて馬鹿っぽい発言が目立つときが多いのですが、本当はそれなりに頭が回りそうな方です。

・ゲルトさんの妹さんが苦手なようです。その妹さんのようすからは恥ずかしさを隠しているというふうでも無く、純粹に彼のことと気に食わないようです。残念です。世に聞くツンデレというものに期待していたのですが……ちなみにこのことをマスターに報告すると、私と同じように残念そうな様子でした。

・名前の意味は‘熱’だそうです……………マスターは凄いです。

私たちは、自分の名前の意味など知らずに死ぬことが普通ですのに……………

「Stella・Ermia・Winnings」
ステラ エルミア ウイニングス

・マスターのクラスメイトで、左前に座っている方です。元気がよさそうです。

・まだマスターとはあまり会話を交わしていませんが、テイアマットさんに声をかけているとちらちらとマスターに視線を傾けています。

・これは確証かどうか分かりませんが、これからよく関わって

きそつな気がします。

・今度、彼女の名前の意味を聞いてみたいと思います。教会の洗礼でつけられた加護のある名前は、きつとなにか意味があるはず
です。

「Porallis・Iirria・Finien's」
ポラリス イイリア フィニエンス

・ゲルトさんの双子の妹さんです。緑の髪が可愛いです。ゲルトさんより、彼女が一緒のルームの方が・・・そっいえば人は性別の問題がありましたね。

・ゲルトさんと違って強そうな雰囲気があります。

・ハイスさんには生理的嫌悪を抱いているようです。きっと脱色された髪がダメなのでしょう。彼の頭を見る度にイライラし始めるのが分かります。

・彼女も、ティアマツトさんと同じように私の存在に気づきました。本当に兄とは大違いです。

・北極星だそうです。

「Alba・Archinam」
アルバ アーキナム

・マスターのクラスの学級担任です。マスターより大きいです。

・少し話し方がマスターに似ているような気がします。マスターの方が全然いいですが。

・右腕に違和感を感じます。

・ 暁らしいですね、髪の色が暁ですね、はい。

第九小節「夕日の歌」

「~~~~~あ……………」

慣れない手書きでメモを書くことに夢中になってしまっているうちに、既に陽は傾いてしまっていた。書いては消してを繰り返していたメモ帳が、夕日の柔らかな赤を受けて同じような色をしていたというのに、アークは書き終わるまで全く気がつかなかった。

ようやく時間が過ぎていた事に気付いたアークは、下の様子を見ている。どうやら生徒たちは食堂に向かい始めた頃だ……………早くしなくてはゲルトとハイスを呼ぶことが出来なくなってしまう。

「こ、こうしてはいられません！ 早くマスターを起こさなくては！」

慌てて自分の主、ラスティを起こそうとした時、アークの知覚範囲に人の気配を捉える。それは、アークが判別できるぐらいにここ二日で見慣れた気配であった。

??
「……………い……………お……………だ……………さい……………た……………」

夢うつつの意識の中、遠くから聞こえてくる声がしてくる。今まで自分を起こしてきた目覚ましの無機的な騒音では無く、新鮮な有機的な音だった。

「って、アークか……………」

その声が、自身が昨日契約した精霊であるアークである事に気付

いたラストイは、ゆっくりと意識と姿勢を起こす。まだ寝ぼけ眼まなこのその目が、アークの姿を捉えると、その表情は何やら焦っているように見えた。そこで意識をようやくはつきりさせた彼は、アークに話しかけ・・・いや、アークが話しかけていたようだ。

「……って、聞いているのですか？ マスター」

「ん？ …………… ああ、聞いていない。」

どうやらアークは、ラストイが意識を完全に覚醒させる前に、何かを話していたようだった。だがそれは肝心のマスターの耳には届いてはいなかった。肩を落として見せたアークはもう一度ラストイに状況を説明しだす。

「……………ではもう一度言います。どうやらここに、誰かが来る、ようです。恐らくあと一分程で到着するでしょう」

「……………ここに何しに来るんだ？ もう夕食だろう？」

自分がここで夕食をとろうとしている事を棚に上げての発言。だが、その次に発せられたアークの発言で、その疑問に少しだけ答えが出たような気がした。

「それで、恐らくなのですが、此地に来るのは……………」
「……………」

……………

人気の無い屋上への廊下を一人歩いているのは、長く黒い髪に、修道服に似た意匠の濃紺の衣服に身を包んだ少女?????ティアマット・マキナであった。廊下の石床に打ち付けられるブーツの底が、廊下に残響をもたらしている。

たどり着いた屋上への扉は、金属で作られドアノブがあるだけの簡素な創り。そのノブを掴んだ手に、革手袋ごしに冷たさが伝わる。開いたドアの隙間から流れる風は、冷たい。開いたドアの向こうに見える夕日の色だけが暖かく感じられた。彼女は「赤」が嫌いだが、この色だけは嫌いになれないでいた。

資材置き場か物置のようなその屋上は、階下の内装の様子とはかなり違った様子を見せる。初めて来るはずなのに、そこに懐かしさを感じた。

「こつやって、「屋上」に来るのは何回目かな……………」

初めて来る場であるにも関わらず、もう何度も来ているように感じられた。歩く彼女を、冷たさを持つ風が撫でる。その風に目をつぶり、呟いた。

「今日「も」何時もより寒い……………かな」

その声は、人に聞かれている事を想定してはいない。

??
?????

入ってきた彼女の死角になる位置に、ラスティは居た。元々寝ていた場所が小高い場所であったため、隠れるのにわざわざ場所を移すようなことはしなかった。そんな彼に、ティアマツトの呟きが聞こえる。

「今日、も、何時もより寒い……………かな」

そんな独り言が耳に届き、その言葉に眉をひそめてしまう。今日、も」とはどういう意味なのだろうと、そんなことが頭を巡った。思考に沈んでいるうちに、足音が止まる。静まり返った音と風に、ラスティは気付き、そして何故か安堵してしまっていた。

何をするのだろうか?????そんなことを思考の中で口にするよりも先に、何処からとも無く鈴の音のようなものが聞こえた。ただそれは例えるものに一番近かったのが鈴というだけだ。その音はとも澄んでいて、それでだから儂さを含んでいた。

直後、オーロラが地上に出来たのではないかと錯覚してしまうかのような光が、辺りを満たした。赤、青、黄の三色が、思い思いに折り重なっている。実物は見たことが無いが、オーロラよりも美しいのではないかと確信したものがあった。

「……………これは……………」

主人の言葉を代弁するかのように、隣に座るアークが驚きの声を漏らした。その光景に見覚えは無くとも、知識に該当する現象があ

ったのも大きい。

そして言葉が歌われた。直後に押し寄せる旋律に、何の心構えもないままに

「Tu fe mi rie sier nor ur , fi gha
a qu l si di ri em (遠く向こう空の下、日は赤く
沈んでく)」

誰に聞かせるともなく、ティアマツトは歌っていた。結界のように音を内にとどめるベルが、その声に深い響きを持たせている。その歌に………まだ最初の一節でしかないにも関わらず、ラストの心は瞬時に最高潮にまで震え出した。

「K ol i d i a z o i e r o l k e r , h i a a i x a
s i e r q i u (小高くそびえる丘のうえ、ここで私は空を
見る)」

音が心に共振する。反響する音に未だ震わせられている中に次の音が飛び込んでくる。そんな既知で未知の歌に息を止めた。

「F o u k a c i n e r v i w l i m o l n , t i u n u
a s u k i a s i e r q i u (何処か違う別の場所、違う人
が空を見る)
T i m i a , o l n i a , n e l m i a , w e i x i a . . . w
o r k a t i g u r i e k i l u k e r u m u (時や場所や
名前や歳や・・みんな違っているけども)」

自身の潜められた息や衣服の擦れるささやかな音、果ては心音までもが邪魔に思えてくるようで仕方が無い。

そんな主の精神の状態が流れ込んでくるアークは、その情報を整

理するだけで精一杯だった。音を聞いて連想される情景が、走馬灯のように次々に流れ込む。

「soufia asiwenna quekilia (それでも同じ夕日を眺めてる)」

紡がれるその言葉は詠語によるもの。そしてそのメロディは、どこか聞き覚えがあるもの。だがその覚えは面影だけで、はっきりしたものは浮かんでこない。そのようなことを記憶と照らし合わせることもさえも、ラスティは放棄していた。

「Owl nexia fum riie (いつも隣に誰か居て)」

「nokt hopiumu siekilia (そう願いはしな
いけど)」

その歌から寄せられる寂しげのあるイメージに心を軋ませる。それは幻聴となって耳元で鳴っているように感じられた。

「sefie oxiar kelfim quokie oul
n (せめて同じ景色を眺めて欲しい)」

「softa lewriessa hopiens (そんなささや
かな願っただけ。)」

これは「彼女の」歌なのだろうか？ 既存の歌に、ここまで心を乗せきつて歌うことが出来るのだろうか？ そんな疑問さえも、押し寄せる感情の流れに押され跡形も無くなる。

ただ音を受け止めるだけの思考をもって、ラスティはずっとその歌に聞き入っていた。

「……………」

一曲を終え、屋上に静寂が戻った。静まり返った空気とは逆に、ラスティの心は様々な音をあげる。音が過ぎ去ったというのに、その心中はまだ激情の渦中の中に居た。

その余韻ともいえる音に耳を澄ませ、ゆっくりと開かれた彼の目には、ようやく冷静さを取り戻した色が見える。次の瞬間、意を決したように勢いよく立ち上がる。

「よつとー!!」

今まで身を隠していた物陰から勢いよく身を乗り出す。そんな行動でたつた物音に反応し振り返ったティアマツトは、突然現れた人影に驚きの表情を浮かべている。そんな彼女の表情を見て笑うラスティは、先手と言わんばかりに挨拶した。

「よつ!!ティアマツト」

ラスティから発せられた簡単な挨拶の言葉さえも上手く飲み込めていないうちに、その場からラスティは飛び降りる。立つ場の高さが同じになった。

「いい歌だな。」

それは、心の底からの賞賛だった。

第十小節「それは一番訊きたかったこと」

「……………」

歌い終えた彼女は、深くゆっくりと、残りの息を吐き出す。周囲を彩っていた光は既に止み、それが歌の終わりを示しているようだった。

またもう一曲歌い出そうとしたその時、背後から物音がした。

「！」

勢いよく、何かに身構えるように、彼女は振り返った。その先には、こちらに笑顔を向けている男子生徒？？？？ラスティの姿があった。突然現れた彼の姿に動揺した彼女は、思考がフリーズする。

「よ！！ティアマツト。いい歌だな。」

呆然とする彼女に、そう笑いかけるラスティ。ここに来てようやく、盗み聞きされていたという事実には彼女は思い至った。見る見るうちに顔が紅潮していく。顔が火照る感覚は、一気に彼女の冷静さを奪おうとしていた。

「もも、もしかして……………きいてた？」

「おう！」

余りにも爽やかすぎるその返事に、ティアマツトは怒鳴り出す。それはラスティには初めての表情で、彼女にとっても久しぶりなも

のであった。

「って、おう、じゃないでしょう!! だい」

「ほい」

「たい何で……え？」

怒鳴り始めたティアマツトの勢いを削ぐように差し出されたのは、大きく膨らんだ袋。いぶかしむように、その袋を見つめる。怒るタイミングを、完全に失ってしまった。

「まだ飯食ってないだろう？折角だから食おうぜ。」

どうやらそれには、購買部から買ってきた食糧が詰め込まれているようだった。ラスティの、拍子抜けするその提案に、急に力が抜けたように大きく溜め息をつく。

「はあ………」

「溜め息なんてついてたら、幸せが逃げちまうぜ？」

その様子に茶化すようにラスティが言う。対するティアマツトは、もうどうでもいいという風に返した。

言ってしまったから、その事を後悔した。

「そんなの、どうせ元々無いよ。」

その返事に、ラスティの表情が一瞬……固まったことを見逃しはしなかった。何気ない、そんな一言だったが、その言葉にラスティ

イは今までとは違った反応を見せていたのだ。

「……………ごめん……………」

こちらが視線を外したと見せかけたときに彼が唇で呟いた言葉に、何故か申し訳ない気分になってしまう。

そして、彼女はこの時確信を持った。

ラスティは、この紅い眼に伝わる云われを理解している、と。

??

屋上でも、吹く風が弱い場所に、二人は並んで座り込む。

屋上の外郭近くに、並んで夕日を臨むようなかたちだった。

そして、アークがかけた簡易結界に気付いたティアマットは眉を吊り上げる。が、アークによるものだと思い至り、その表情を元に戻した。そんな表情の変化を隣でラスティがニヤニヤと笑いながら見ていたのに気がつき、勢いよく顔を背ける。ラスティから見えるその耳は、すこし赤かった。

二人の間にラスティが買ってきた食糧を置くと、彼がティアマットに話しかける。

「購買のもんだが、俺からの奢りだ。半分までなら持っていってもいいぞ。」

そう言われて覗き込んだ袋の中には、明らかに一食分とは思えないほどの食べ物が詰め込まれていた。

(これだけあれば、私だったらどれだけでもつかない……?)

恐らく二日三日ぶんはあるだろうと、彼女は検討をつける。ソレと同時に、これだけの量を一人で食べるつもりだったのかと疑問に思った。その事を口に出す事は無かったが。

「半分も食べれない。……これでいい。」

そうぶっきらぼうに言い放ったティアマットは、牛乳とパンを二つほど貰う事にした。それからラステイは、自分が食べるものを選び出す。取り出したサラダのラベルには、パインサラダと書かれていた。

「はは、コイツは何か作為性すら感じるぜ。」

そう言いながら、そのサラダの名前に笑う様子に、ティアマットは訝しむと同時に、どこか彼が子供っぽいと思う。そこまで考えて、自分がラステイをじっと見つめていたことに思い至り、慌てて顔を背ける。その先には、地平に沈む陽が淡く輝いていた。

始めのうちは無言で食べていた二人だったが、唐突に、ラステイが口を開いた。

「ほんと、吃驚したぜ。屋上で何やるんだらうって思ったら。まさかティアマットが歌を歌うなんてな。」

「う……………ら、ラステイこそここで何してたの?」

「ああ俺か? 昼寝、さ」

あっけからんとしたその答え、彼は本当に何を考えているのだろうと、彼女は疑問に思った。

「……………呆れた」

「まあまあ、いいじゃねえか。学院の中そのものはアークが俺の代わりに全部覚えてるんだからさ。」

そんなことより……………本当、上手かったぜ、歌。」

「そう……………かな」

ここにきて突然の賞賛。辛うじて答えるその声には、自信がこもっていない。

そうだよと、微笑んで励まされて彼女は更に顔を赤らめる。それでも、そうかなと、まったく同じ言葉を返すだけだった。だがそこには、今まで見受けられた少し張り詰めた印象が感じられなかった。

「今まで誰かから、歌について何か言われたこともなかったから……………」

そう語るティアマットの表情は、少し寂しさを垣間見せるも、嬉しげなものだった。

そんな彼女の表情を見たラスティは、安心したように言った。それは、今までに無い優しい声色だった。

「そっか……………じゃあ俺は、ティアマットの歌を評価した最初の人間ってわけだ。」

そう言って何故か嬉しそうに笑うラスティ。そんな彼に、彼女は

子供っぽい印象を抱く。

人と殆ど接することの無い彼女は、こんな彼の反応に戸惑いつつも、思わずくすぐったくなる。

新鮮だった。

そうして時を過ごす。特に会話をする訳では無いが、並んで夕日をみて食事をとることが、彼女には新鮮だった。

こんな時間が続けばいいと思っっている自分からしくないと感じたが、不満ではなかった。

夕日を臨み、並んで食事をとる。その食事は購買で購入したもので、味は食堂の物には劣る。だがそれは、‘肴’次第で単なる食事以上の何かに昇華する。

決して会話の数は多くは無い。ラスティが話し、ティアマツトが受け答える・・・そんな会話が途切れ途切れでありながら何度も繰り返された。

歌の話題などで上機嫌に、返る言葉が少なからうとも積極的に話すラスティ。恥ずかしそうに言葉数少なくではあるが、いつも見せていた他者を寄せ付けない表情に親しみを浮かばせながら答えるティアマツト。それは、少女が心の中で憧れていた日常だった。

時間にして、一日の二十四分の一と少しでしかない僅かな時間。そんな時間であっても、ティアマツトには二十三倍のソレよりも価値があった。

何か思惑があるのかもしれない、なぜ‘そう’してくれるのか分からない。だがそれでも、自分を‘紅い眼を持つもの’では無く、‘ティアマツト・マキナ’として扱っていてくれることがそんな疑問をどうでもいいものに思えさせてしまうほどに、彼女は嬉しかった。

会話が無く、ただ夕日を前に沈黙を重ねるだけの時間にさえも意味があった。ただ過ぎ去っていけばいいと思っただ時間とは違う。引き止めていたい何かがあった。

「……………こうして夕日を見るのってのもいいな。」

今までよりも短く、しみじみと同意を求めるような声。ティアマツトの方を見ずに、空の向こうに沈みかけたそれを見ながらもらずあれだけあつた大量の食べ物をすべてその胃に収め、後方の積み上げられた木材の壁に背を預けてその体を休めていた。

そんな彼に、ティアマツトは自身の髪を吹く弱い風を感じながら答えた。彼女は彼の隣で、膝を抱え込むようにして座っている。

「うん、そうだね……………赤は嫌いだけど、夕日は嫌いじゃない」

それは以前から抱いていた感情だった。誰にでも同じく、優しく照らしてくれる夕日。昼間空高く上がっているそれとは違い、直に見ても目を焼く事がないそんな光。赤は嫌いであつたが、そんな光をだす夕日のこんな赤だけは、彼女は嫌いではなかつた。

「……………赤は嫌いかな？」

ラスティから返されたその言葉は、質問の内容の割りに長い時間をかけて発せられたものだった。そんな僅かではない時間の間の変化に、自身が感じた確信をより確かにさせる、そんな証拠のようなものを見つけたような気がした。

「うん……………やっぱり、私、‘こう’だから」

そう言ってラスティの方に振り返る。同じように彼女を見つめているその目に、自身の紅く淡く光る眼を焼き付けようとするかのように見える。質問と行動の意味を何となく分かつているラスティは、彼女が視線を外すまでしつかりとその眼を見続けていた。

‘人々に嫌われる原因であるこの眼の色を好きになれる訳が無い’

その眼はそう言っているようにラスティは感じた。きっとソレは間違っていないだろう。

伝え終えたようにティアマツトが視線をそむけた後、その場には先ほどとは違った沈黙が訪れていた。ただお互いに並んで、風に吹かれ、沈む陽を見て・・・同じようで少し違うそんな状況の中で、ティアマツトはこの日初めて自分から話題を振った。

それは……………普通、人には大した話題ではないだろう陳腐なものだった。

「ねえ、神様って……………居ると思う？」

息こそ飲みはしないが、その予想だにしていなかった質問に表情を固めるラスティ。ティアマツトが夕日を見つめたままでさえなければ、その様子の変化に何か察したのである。彼は、自身の動揺が気付かれないように答えた。

「さあ……………どうだろうな」

らしくも無く素っ気無くなってしまった対応に、内心で舌打ちをする。だがそんなラスティの状態に気がつかないかのように、彼女はその言葉を受けて話した。

一瞬、風が少しだけ強くなる。それは、主人の感情の起伏をうけたアークが一瞬だけ出してしまった、結界の綻びによるものだった。

「もし、神様が居たらね？ 何を思って、この世界を創ったんだろ
うって……………そう、思うんだ」

質問ではなく、ただ、自分は疑問であると。世界を創った神たる存在が、一体何を思ってこの世界を形作ったのだろうか……………

…それは、彼女が抱く疑問としてはある意味当然といえるものであ

った。

夕日を見たままの彼女の横顔を、ラスティは見つめる。既に結界のほころびは収束され、座ると地面につく程であった彼女の長い髪は、風が収まると再び地面にその黒を横たえる。

その一瞬舞い上がった髪の毛の奥で垣間見たティアマットの表情に、ラスティは疑問を投げかけずには居られなかった。

「……………なあティアマット……………君は、その神を恨むか？」

その質問の中に、答えを求める渴望を滲ませる。彼女はその質問には答えず、ただその口元を緩めるだけだった。

無言のまま、今まで座っていた小高い場所から地面に向かって飛び降りるティアマット。二メートル近くはあるだろうその高さからの衝撃を微塵も感じさせないやわらかい音で着地した彼女は、衝撃を逃がしたその足でクルリと振り返る。遠心力で舞った濃紺の服と漆黒の髪が、彼女の眼がラスティを捉えると同時に舞い降りる。

「さあ……………どうでしょうね」

先ほどのラスティの発言に対するあてつけのような物言い。その口調と、陽が沈みきったせいで少し見えにくくなってしまったその表情からは、感情を読み取ることは出来なかった。

第十一小節「それは話すことのできないこと」

「ラスティ、明日もまた此処に来るの？」

「歌を聞かせてくれるというのなら、来ようかな」

そんなからかったようなラスティに、肯定ととれる短い返事を返して、彼女は屋上から去っていく。時間はそれなりに遅かった。

ティアマットが去っていったのを見届けて、ラスティは飲み干したパックの飲料の空を、袋の中に投げ入れる。それは少しだけ狙いが外れて、中に納まることなく傍らに転がった。

「一番聞きたいことだったんだけどな……………これが」

沈んでしまった夕日の跡を見つめるようにして、そう、呟いた。

ティアマットが居なくなってしまうてしばらくしてから、ラスティはそこから立つ気配を見せなかった。アークは少しづつ冷えていく気温を和らげようと、無言のままに結界を強める。

話相手を求めるような主の雰囲気、アークはその姿を現す。そこは、先ほどまでティアマットが居た場所だった。

「……………物語を書くときにな、俺は身の回りの色んな物事を参考にして、とにかく多くの事象を、設定として取り入れた」

それは、ただ物書きが自身の執筆についてのことを語るようにしか聞こえない語り。だが、その語りが持つ意味を、傍らで耳を傾けているアークは理解していた。

今は少女の姿をしているアークが、その長い髪も相まってティアマットに重なって見える。こちらを見つめるその表情に、背格好な

ど色々な点で相違があるが、なぜかラスティはそう思ってしまった。

「アルビノって、知ってるか？」

傍らに居る自身の使い魔たる精霊に、質問を投げかけるラスティ。その視線は未だ中空に向けられて、その心情を読み取ることは出来ない。

僅かに首を傾げさせたアークが、少々自信なさ気にその質問に答える。

「確か、生まれつき色が異常に白い個体……でしたでしょうか？」

その答えを受けたラスティは、それに詳しく説明を付け加える。

「ああ、遣伝子の異常のせいで色素が作られないおかげでそうなるんだ。そしてな、アーク。その眼は網膜の血液の色を反映すること……」

そしてゆっくりと眼を閉じる。それは祈りをささげるような表情で、懺悔を重ねるようであった。

「紅く見えるそうだ」

まあ、ティアマットのソレとは違うんだけどなと、あとに続いたその言葉は消え入るように小さい。だがそれを、しっかりとアークは聞き取っていた。無言で聞いているアークの様子を受けて更に語る。それは「ココ」ではアーク以外に話せないことで、そうすることが今のラスティの精神を安定させているともいえた。

「ソレを知ったのは、インターネットっていつて、まあ………要は

色々と情報を集められる端末だと思ってくれ……………その時はネタ探
しに夢中だった」

「そんな時に見つけてな……………そのアルビノの動物は、世界では神
聖と崇められるか、不吉だと恐れられるかどちらかだった……………」

そこまで言われては、何故自分の主がこれほどに苦しそうな表情
をしているのか、その事を容易に察する事が出来た。事情を理解し
始めたアークが、その表情を揺らがせる。不気味なほどに無表情な
自身のマスターにかけたその声は、酷く震えていた。

「ではマスター……………貴方は……………」

アークの言わんとするところを察し、ラスティは自嘲気味に微笑
む。とても笑っているようには、アークには見えなかった。

「ああ……………俺が選んだのは後者だった」

そう無機質的に告げる主の声が、アークにはつらかった。「そう
、思わないで下さいと、出来るのなら言ってしまう良かった。だが、
感情を表に出そうとしない主の表情が、それを許さない。」

「そう、俺はこの世界を、そうしたんだ」

もう、やめて下さいと……………そう……………言いたかった。だが、主
のその懺悔にも似た告白を、アークにはもう止めることは出来な
かった。自分に悟られまいとしても、自然に流れてくる感情に、そう
する事を躊躇させられた。服の上に乗せられた手が、薄青色のスカ
ートを強く握り締める。

「俺が、彼女を独りにしたんだ」

声を荒げる訳でもない。涙を流す訳でもない。

「偶然に過ぎないのは分かっている……だが、こう、思うんだよ、もっところさ、平和な世界を創ってやれたらなとかさ……」

「何を思っこの世界を創ったんだろう……」

この言葉が、彼にとってどれだけ辛いものであっただろう？

主との繋がりから感じられるその感情を直接的に理解してしまうから、アークはラスティのそれが痛々しくて仕方が無かった。

ただ無言で、彼の言葉を受け止めることしか出来ない。彼の心を癒す手段が、精霊たるアークには分からない……そのことが、ひどく胸を締め付ける。

「なあ、アーク……俺は……アイツに何をしてやれる？」

そんな質問に、アークは何も答えることが出来なかった。ただ黙って主の手を握り、化身の肌がそのぬくもりを感じる……

私は、マスターに何をしてあげられるのでしょうか???そんな言葉投げかけることのできる相手が、アークには居なかった。

その翌日の昼休みのことだった。非常に混み合う学院の食堂に行きたがらないラスティは、購買で購入した弁当をゲルトとハイスと食べていた。ラスティの机の位置に集まるようにして、ゲルトが向かい合わせ、ハイスがその横につけるように机を動かしている。ラスティの提案したこのようなことが新鮮だったのだらう、机を移動させてくっつけるというただそれだけの行為に、二人は目を輝かせ

ていた。

それを見ていた他のクラスメイトたちも、彼らと同じように机を動かし始める。貴族出身の生徒たちも、全員ではないがその貴族らしからぬ行動にゲルトたちと同じような表情を浮かべていて、そんな彼らを見る平民出身の生徒たちもどこか楽しげだ。

こうして見ていると、この学院に入学している貴族出身の生徒たちはその立場を洩にかけることなく、平民出身の生徒達とこの二日でかなり仲良くなれているように思える。

平民からしてみれば、装飾こそ豪華だが、そこには貴族特有の堅苦しさや陰湿さを感じず……

貴族からしてみれば、空気こそ緩いが、そこに安っぽさを感じない。

きつと、そうほうに配慮した校風にしようという側面もあるのだろう。だがそれ以上に、ここ七年間で行われたという貴族たちの意識改革なるものが功を奏しているという。何が行われたかはわからないが、そのおかげで、貴族たちの平民に対する態度がかなり変わったという。まだ完全にといいわけでは無いらしいが、この教室を見てみるに、大分効果はあるのだろう。

「いやあ、やっぱこう、堅く苦しくない生活っていいわなあおい」

「ハイスさんに堅苦しさというものが、今までにあったかどうか分かりませんが、どうなのでしょう?」

こうして、食事をしつつ雑談する貴族の光景は、この学院では珍しくなくなりつつあったらしい。もちろん、'礼節科'なる選択教科で貴族の生活上必要な要素を学ぶ機会はあるらしいが、普段のうちは気にしない。

そんな貴族の様子は、育ちの良いだけの友人という認識を平民出身の生徒に植えつけるには十分だったようだ。

「（思っでいらっしやっただよりも、貴族と平民は仲がよろしいのですね）」

「（時代の流れが、そういう風になってたってことだ、これがな）」

嬉しそうに教室の光景を見ているラスティの様子をうけて、アークが話しかけて来た。その陽気な声色に、念話で同意の返事を返す。そんな食事も終わり、残りの時間を談話でつぶしていると、そこに一人、介入してくる女生徒の姿があつた。灰銀の髪を短く切りそろえ、ティアマツトの左眼のように濃くはないが青い眼をしている。

「ねえいいんちょ？　ちょっといいいかな？」

そう言ったのは、ステラ・E・ウィングス。貴族出身の生徒だが、その元気の満ち溢れた気性と言動で、平民出身の生徒達にかなり親しみを持たれている子である。

かといって貴族出身の生徒たちに受けが悪い訳でもなく、このクラスで貴族と平民の関係の橋渡しにもなっている。そんな存在だった。このクラスの仲がいいのも、彼女の存在によるものが大きいのだろうとラスティは考えている。それと同時に、ゲルトではなく彼女を副委員長にすればよかつたとも考えていた。

「え、俺？」

座った姿勢から、見上げるようにして反応するラスティ。その隣では、ゲルトとハイスも同じような反応をしている。色気のあるような話題では無いようだが、どこか言いにくそうにやや小さめな声で、用件を言った。

「うん……ちょっと相談ごとなんだけどさ……それが……アイマツトちゃんについてなの」

「アイツの？」

だれかれ構わず愛称や‘さん’‘君’果ては‘ちゃん’づけで呼ぶような彼女だったが、その口から出てきた名前に驚きを含めてラストイは眉をひそめる。

彼女はラストイの左前に座っていたので、椅子をラストイの机まで持ってくる、話が長くなるというように、その白桃色のスカートを丁寧に扱って座った。言動とはちぐはぐなその所作は、やはり貴族出身なのだろうかわせる。

何故自分なのだろうと考えていると、そんな表情を見て取ったステラが答えた。

「うん……ほら、いいinchよってあの子と仲いいでしょ？」

「そついやそつだわな。オレとしては、すこしばかり気になんぜ」

「確かにそつですね」

その言葉は、ラストイを置き去りにしたまま、他二名を納得させる。初めは納得のいかない様子ではあったラストイだが、彼女に話しかけるのは自分しかいないという点に思い至ると、少々ではあるが納得した。

「それでね？　ここからが本題なんだ……あのね？　わたし、あの子と……話したいんだ」

恥ずかしげに、気まずそうに言うその様子は、何か思いつめたよ

うでさえあった。

自分から話しかければいいだろうという言葉を追いつきに
して、どうしてという言葉が、先に口を飛び出していた。

そして彼女の口から、入学式の日にあった話が語られた。

第十二小節「二人の心、鈴音に」

「はあゝ。紅い眼の人かあ……」

入学式の日、ステラ・E・ウィニングスの寮に向かうあしどりは重かった。ソレは、彼女が耳に挟んだことが原因である。それは、彼女の情報通の先輩からもたらされた。

曰く

「今年の入学生には、紅い眼の女性とが居るらしい」
「名前はティアマットというらしい」

そして見た部屋割りの表の中で、同じ番号の四角の中に囲まれた、自分の名前とティアマット・マキナという名前。自分が思っているほど、自身の運は強く無いらしいと、その時の彼女は思った。

どうやら自分のルームメイトは、そのうわさの紅い眼の持ち主であるらしいとわかった彼女の、その足取りは重い。式後のパーティーからは早々に出てきた彼女は、その紅い眼についてのことはかりを考えていた。

紅い眼は災厄の象徴というのは、この国……いや、この大陸の間には共通の認識だった。紅い眼の吸血鬼の伝説、魔獣と呼ばれる存在の眼？？？？？そして七年前に現れた異常な存在たちの存在も、それに拍車をかけていた。

突然現れ、隣国を巻き込んで国中に恐怖をばら撒いたその存在は、みな総じて眼が赤かったという。血濡れの眼の悪魔たちと、当時は言われたものであった。その傷跡が完全には癒えていない今の世の中は、その紅い眼を恐れている。

勿論、その紅い眼の持ち主がその存在たちと同じということは無いだろう。それなら学院に入学など出来ない。

だがそうは言っても、不安にならずには居られない。

そうして悩んでいるうちに、いつのまにか、気付くと彼女は既に部屋の前まで到達していた。

その扉の前に立ち止まり、彼女は扉を開けることを躊躇する。

「（ええい！！らしくもない。こうなりや覚悟を決めるんだよ、わたし！）」

そう奮い立たせるようにしてドアを開けた彼女を出迎えたのは、明かりの付いていない暗い部屋だった。その様子に、ステラは軽く口をあけたままで固まっている。

「おろろ？ これってもしかして、未だ来てないって……………ん？」

再起動し、まだ相手は来ていないという判断を下した彼女を下そうとした彼女の耳に、ゆつくりとした金属音が聞こえる。それは、ドアの鍵を閉める音だった。

どうやら、ステラが到着する僅かに前に、ここにはその人物が到着していたらしい。鍵を閉めるのにどれほどゆつくりなのだろうと思うほどに緩やかでちいさなその音が、その存在を告げていた。

布の擦れる音の後、部屋からは物音が消えた。

部屋に明かりを灯そうとした姿勢のまま、彼女の動きは固まっていた。

ゆつくりとドアを閉めた彼女は、物音を立てないように部屋に入り、そして紅い眼の少女が入っていったであろう部屋の前で立ち止まると、自らが尊敬している学者を真似して額に指を押し当てて思案した。

何故鍵をかけて、早々に寝室に入ってしまうのか。

扉の向こうで何をしているのか。

だが、どう悩もうとも、そんな曖昧な疑問には、思いつくコトな

どいくらでもある。

そしてそれはどれも想像でしかなし、確実性など論外だ。そこで彼女は……

「（こうなったら、確かめてやるうじゃないの）」

……貴族らしからぬ気合の入れ方でガッツポーズをとると、最新の注意を払いながら扉に近付いた。その真剣な表情は、まるで建物に忍び込んだ盗人の様。つまり、盗み聞きでもしようというのだ。そして、眼と鼻の先までドアに近付いたところで、部屋の中からはすすり泣きが聞こえてきた。

「え……………」

耳を近付けようとしたその動作がとまる。眼は驚きに見開かれ、肺は一瞬その役割を忘れる。彼女の思考は混乱した。

それは、彼女が予想だにしていなかったことだから……………

……災厄の眼を持つという少女が、薄い扉の向こうでしていることは、すすり泣くということだから……………

怖い????????まだ顔を合わせてもいない少女に抱いていたはずのその感情は、いつの間にか消えていた。

だが、代わりになる感情が、彼女には浮かんでこない。混乱した彼女の脳は、抱くべき感情をたたき出せない。

わたしは何に怯えてたの？ 彼女はどのようにして泣いてるの？

そうしてそのまま立ちすくむステラは、その泣き声が止んでしまったあとと暫くそこを動くことが出来なかった。その手は知らず知らずのうちに、お気に入りの色のスカートに強く皺を作っている。その手からは、何時までも力が抜ける兆しは無い。

そして……………その部屋に、その日明かりがとまることは無かった。

今日も屋上で、空を眺めながら仰向けになっている。徐々に色付きつつある空が、時計に代わり時を告げている。

大きなあくびをする。その行為は、これから来るであろう人物を待っているが故のもの。

「やっぱり今日も来たんだ、ラスティ」

その声は、待ち望んでいた‘彼女’のものだった。振り向いて彼女の姿を、彼はその視界にとらえる。同時に、昼にステラが呟いていた言葉を、思い出す。

『わたし、あの子のルームメイトなんだけど………まだ、話したことはないんだ』

まだ部屋で顔を合わせたことも無いと言うその発言を思い出して、普段は何をしているのだろうと、そうラスティは質問したくなった。

そんな彼の心中は知らず、彼女は昨日座っていた位置に立った。その右腕に、包みが握られているところを見ると、彼女は今日は食料持参で来たらしい。

「えっと………待ってたの？」

『最初の日にね、わたしが来たころにはもうあの子は部屋（寝室）に居たんだ。それでね、近づいてみて分かったんだけど………あ

の子、泣いてたんだ』

そう尋ねてくる彼女は、きつと不安だったのだろう。寝室が分かれてるとはいえ、同じ部屋で暮らすことになる相手に、拒絶されてしまうのが怖かったのだ。

そして、そう思えば思うほど、ラスティの中の罪の意識は大きくなる。

「ああ。言っただろう？ 歌を聞かせてくれるなら明日も来るって」

そう言われて、軽くではあるが嬉しそうに微笑を垣間見せる彼女は、何を思っているのだろうか？

『君は、その神を恨むか？』

昨日聞きたかった疑問が、どうしても頭から離れない。

『放課後、屋上に来てくれ。ついでに弁当も』

そうラスティにいわれて屋上に行き、指示を受けて隠れるように物陰に隠れていたステラは、入学式の日のことを思い出していた。

彼女と話したいと言ったのはいい、だが何を話せばいいのだろう。どう接すればいいのだろう。冷たい風が奪っていくものは、体温だけではないうような気がした。

「（ステラさん。どうやら彼女が来たようですよ）」

思案に沈むステラに声をかけたのが、半ば無理矢理連れてこられ隣に座っているゲルト。そしてその一つ奥には、半ば無理矢理連れてきた張本人のハイス。二人は今回の件に便乗したようにこの場に居た。

やっとかよ、そう呟くハイスと同じ心境で、彼女は耳を澄ませた。ティアマットの方から声をかけているのが分かる。これは少々意外だった。

「えつと……待ってたの？」

「ああ。言っただろう？ 歌を聞かせてくれるなら明日も来るって」

そう言葉を交わす二人の様子は、傍から見ると待ち合わせをする恋人の様。そんな二人の???特にティアマットが放つ言葉のその声色は、クラスに居た時よりも明るいのが容易に分かる。それほど彼女はラスティに心を開いているのだろうか。

「（会話だけ聞いてつとカップルみてえだな、おい）」

「（そんなこと本人に言ったら多分怒りますよ?）」

「（二人とも静かにしなさいよ。聞こえちゃうよ）」

確かにハイスが言ったことは他二人も思っていたことだが、少なくとも、ラスティが彼女に持っている感情は少し違うような気がするとも思っていた。

それにしても、歌とは何だろうか？

その疑問を誰が口にするよりも早く、聞こえてきたのは鈴のような澄んだ音。見たのは赤・青・黄三色の光のベール。

そんな異様な光景に、意外にも心当たりがあったのはハイス。彼

の口からは、二人には聞きなれない言葉が聞こえてきた。

「鈴唱、……………マジかよ」

「(え、何？ ハイス君しって……………)」

その疑問をさえぎるように、直後その場を歌が満たした。それは、開けた空間で歌っていることが信じられない程に響きを持っていた。反響する音が、その場に居た全ての心に染み渡る。

それは、詠語の歌。神秘の宿る言葉の歌だった。

「Tufe mirie sier nor ur, figha
aquq siudriem)遠く向こう空の下、日は赤く沈
んでく)」

「Kolidia zoier olker, hia aixa
sier qiu)小高くそびえる丘のうえ、ここで私は空を見
る)」

「Fouka ciner viwlim oln, tiunu
asukia sier qiu)何処か違う別の場所、違う人が
空を見る)」

Timia, olnia, nelmia, weixia…wo
rkati gurie kilukerumu)時や場所や名前
や歳や…みんな違っているけども)」

「soufia asiewenna quekilia)それ
も同じ夕日を眺めてる)」

「Owl nexia fum riie（いつも隣に誰か居て）」
「nokt hopiumu siekilia（そう願いはしないけど）」

「sefie oxiar kelfim quokie oul
n（せめて同じ景色を眺めて欲しい）」
「softa lewriessa hopiens（そんなささやかな願っただけ。）」

その歌が終わるまで、誰も何も言葉を発しなかった。いや、発せなかった。その残響は空気を震わせなくなってもいまだ意識の中に残り、感傷を与える。

「すごい……こんな歌があるなんて……」

賞賛の言葉を捜すには、あまりにもその心は震えすぎている。感動で紅潮しているその顔は、寒さに凍えていたことなど忘れていくかのよう。隣のゲルトも同じような表情を浮かべていて……

「あれ？……ハイスさん？」

……さらにその隣のハイスは、以前からの知り合いのゲルトさえ見たことも無いような表情で、歓喜に打ち震えていた。

それは歓喜を通り越して驚愕になり、ハイスの顔を蒼白にさせていった。

第十三小節「歌を聴いて」

「……………ふう……………」

歌い終えたティアマットが、肺に残った息を最後まで吐き出す。三色の光の中で映えていた彼女の黒髪は、つい先ほどまでは光に喚起されたかのように重力を無視して軽く風に吹かれていた。

眼を閉じていたラステイが眼を開く。視界からの情報を遮断することにより鮮明に音に聞き入ろうとしていた彼は。眼を開いた時に目の前に広がっていた空をはっきりと認識するまでに僅かなタイムラグを感じたような気がした。それほどに聴覚に自分は集中していたのだろうか、そう自覚して笑う。

「ああ……………昨日も聞いたが、やっぱりいいなあ」

そう呟いて恍惚の表情を浮かべる彼は、本当にここに歌を聴きに来てくれているだけなのかもしれないと彼女に思わせる。そこまで評価されているは余りにも恥ずかしいもののだが、自分の歌が賞賛されるのは悪くない気分ではあった。

ラステイを覗き込むように移動する。彼の相当に色の濃い眼は、確かにティアマットの眼を正面から見つめている。

ティアマットに語りかけるといふ風でもなく、独り言のように呟くラステイにティアマットは、上から覗き込むようにその近くに立つ。髪が重力に引かれ、手を伸ばせば届きそうな位置にあった。

「どっつするっ？」

それは、まだ歌ってくれるという意味なのだろうか。それともま

た別の意味だろうか……ラステイとしては、もう一、二曲歌ってもらいたかったのだが、‘用事’があったことを思い出し、それはまた次の機会にとっておくことにした。

仰向けの姿勢から上半身のみを起こし、彼女の眼を見据える。ただかすかに光を放ち続けているそれと、光を引き込むように在る深青のもう片方を見つめて、言葉を告げた。

「ああ………そういえば、言い忘れてた、んだが、今日はまだ‘お客さん’がいるんだ」

その言葉の意味が理解できなかった彼女は、彼がその‘お客さん’を呼ぶまで固まってしまっていた。いや、呼ばれてなおさら固まることになってしまふ。

「お〜い！ そろそろ出てきてくれ！」

??
??

「さて、今日は観客同席で飯を食おうってな、これが」

夕日側から見て右から、半円を作るようにステラ、ティアマツト、ラステイ、ハイス、ゲルトの順で並んでいる。丁度その中央になるように座ったラステイが、その食事を進行(?)した。

弁当を持って来いという彼の指示は、こういうことだったのだ。同じ釜の飯を食うとも言いたいのだろうか……ラステイの作り出

した流れに半ば巻き込まれるようにして、今のかたちを作っていた。せめて何か言ってくれてもよかったのに……そんな恨めしげなラスティへ向けた視線は、今回は効果があったと見える。視線に気付くと気まずそうに後頭部を掻いた。

「なあ？ どうだった？」

そんな視線から逃げるように皆に質問を投げかけるラスティ。彼は一体何がしたいのだろう……そう思ったティアマットは、直後に発せられた回答の主に視線を投げかけた。

「ああ、すげえいい。マジで、ホントに……ああ、アレが鈴唱かあ」

即座に回答したのは、脱色された薄い色の金髪に暗めの赤の細身のライダーズジャケットを着ていたハイス。ティアマットが見ていた限り、普段はもっと気合の入らない表情で、ガラの悪いという印象の強かった彼だが、今このときのその眼は子供じみて輝いていた。

「すつげえよなあ！ あんな大規模に制御された力場んなかで、あんなに綺麗に歌えるんだぜ！？ それにあの旋律……原曲が、アウス・デア・ノイエン・ヴァルト」の第二番だっただけのはわかるが、まさかあんないい歌にしちまうなんてなあ！！」

今まで黙り込んで難しい表情をしていた彼が一変、決壊したかのように饒舌になり始める。それにつられたように、その話題にラスティが介入していった。

「アウス・デア・ノイエン・ヴァルト。……ああ！ そうか、あの旋律だったのか！」

「お！ ラステイはわかんのか!？」

どうやら話題が一致したらしい彼らは、途端に歌について話し始めた。驚いたようにその二人を見つめていたティアマットに、話しかけたのはゲルトだった。困ったように苦笑を浮かべている。

「すみませんティアマットさん。こう見えてハイスさんは音楽好きなんです」

どうやらラステイさんもそうみたいですけどね、と後に付け加えた。困ったようにしているティアマットに、視界の外から、今度はステラが声をかけてくる。

「バカは放っておこう？ バカは」

そういい捨てて同意を求める彼女の表情は明るい。そこには、以前まであった恐怖の色はすっかり抜け落ちていた。

そしてこの時、彼女はようやく、ラステイ以外の人間と会話をした。

「うん。……………そうしたほうが、いいかもしれない」

ただ受け答えるだけの反応だが、こうして会話できたのは、双方にとって大きな進歩。簡単なことで、何気ない日常の一コマになりそうですらない小さなこの一言は、ティアマットにとっては希望を象徴しているようにさえ思えた。

歌について語ってばかりのラステイとハイス。時々からまれ巻き込まれるゲルト。怒鳴り、人が困ティアマットっていると彼らに怒鳴るステラ。

そして、そんな彼らを見て笑うティアマット。それは、今までに

見せた事の無い、晴れやかなものだった。

「あ、もうこんな時間です。今日は課題やっておかないと拙いですよ」

そんなゲルトの一言に、日が完全に落ちかかっていることに気付いた一同。この集まりは、もう終わろうとしていた。

自分で作ってきた弁当を纏めるステラ。広げていた包みに全てを包み終え、背後に人が立っていることに気付く。

「ん？」

それは、何か言いにくそうにこちらを見ていたティアマットだった。まるでなにか期待して、でも期待が持てなくてといった、そんな様子。

クスリ、そう笑って、彼女の意図を察する。立ち上がって、彼女は少女に向き合った。ティアマットよりも一回り大きいステラの視線は、少し高い。

「一緒に帰ろう？」

「うん……そうする」

素っ気無い言葉でそう返事をした彼女のその表情を、沈みかけた夕日の光が最後に明るく照らし出していた。

そしてこの日初めて、彼女たちの部屋では、おやすみの挨拶が交わされた。

明るくなつた?????????入学から三日間のティアマツト・Mのことを見ていた者であれば、四日目の彼女を見れば誰しもが驚くことだろう。

彼女は、誰とも言葉を交わすことは無かつた。まるで自分の方から避けるように、教室の窓側の後席にすわり、休み時間中もずっと空を眺めているだけだった。彼女が声を発する時と言えば、隣の席のラスティハルト・ジーンが挨拶をしてきたのに返すぐらいであつた。

だが、きょうはどうだろう? クラスの中でも中心的存在になりつつあつたステラ・E・Wが彼女と一緒にクラスに入ってきたのだ。クラスは騒ぎ出すことは無いが、皆その光景に視線を引き寄せられている。

彼女たちが向かつた席の隣では、何時にもまして笑顔を見せているこのクラスの委員長、ラスティハルト・Xの姿がある。その周囲には、隣国の有力貴族でもあるハイス・G・Sとゲルト・A・Fの二人。

彼らと交わす彼女の返事は、言葉そのものはいままでとかわらないが、その声色は喜色を帯びている。

‘何が起きたのだろう?’

それはこの日から暫く、クラス中で話題になつた。

第十四小節「魔術って何だろう」

「ねえ？ 魔術ってなんなのかな？」

ある日の夕、ステラの口から発せられたその疑問は、その日の授業から来るものであった。

その日の式学の授業、同一魔術においての個々人ごとの違い、という題で行われた。場所は競技場、教師は担任のアルバ先生である。

「魔術は未だ謎が多い。魔石と式と詠唱の三つで行われるところまではわかっているが、同じ現象を起こすものでもその組み合わせは大きく異なる」

そうして彼は、生徒たちに三人以上でグループを組み、何かしら特定の魔術を決定させ、ソレをグループ内で相互に観察。レポートを提出するというものだった。

勿論、ラステイはゲルト、ハイス、ティアマツト、ステラの五人放課後に屋上に集まるメンバーでグループを作った。彼らが設定した魔術は、‘赤’の初歩の初歩：一般に‘ファイア・ツイボール火炎球’と呼ばれるものである。

標的として立てられた案山子を前に、彼らは集まっていた。順番を決めるためである。その決定方法は、古来世界で己が身一つで出来る運の勝負とされる‘ジャンケン’?????勝った順に魔術を

行うことになっている。五人は等間隔に並び輪を作り、真剣な表情でお互いを見ている。

「よし、いいか？」

ラスティのその呼びかけに答えるように静かに頷く四人。それを見て、ジャンケンの音頭をラスティがとる。

「最初はグー！ ジャンケンポン！！」

その掛け声と共に、五人は己が運を託した手を繰り出した。そしてその勝敗は??????

「くそお！ 何故だ！？ 何故俺は!?!」

そういつて膝から崩れ落ちるラスティ。その悲愴に満ちた表情が、ジャンケンの勝敗の結果を物語っていた。ラスティが繰り出したのはグー、そして他のメンバーが繰り出したのはパー。一回目のジャンケンは、ラスティ一人のみが敗北する結果となった。その確立は八十一分の一、百分率にして約1%。そんなある意味幸運とも取れる確立の低い状況を、ラスティは引き寄せた。その運の低さは一般的なソレを凌駕している。

輪の外で肩を落とすラスティを、アークが慰める光景を（ティアマットだけが）見ながら、残る最後以外の順番を決めた。

そして、その最終的な順番はステラ、ゲルト、ティアマット、ハイス、ラスティの順となった。

「よし！ それじゃあ行つくよお！」

その元気を表すような灰銀のショートヘアの輝きを携えて、ステラが詠唱に入る。魔石を握った左腕を、案山子に向かって突き出す。詠唱と共に、小さな赤の石片は浮かび、輝き、小さな魔法円を形作る。

「saktie, velke som hailt orten）
描こう、熱いその心のままに）」

呼びかけるような文面で詠唱された詠語コトバに答えるように、その魔法円の前に直径二十センチほどの火球が現れた。その火球は目標たる案山子を僅かにそれて、右腕に当たる部分を焼いて通過した。その結果に、悔しそうに口を曲げるステラ。

「うう……。外したあ！」

「これなら、案山子の交換は要りませんね。では、次は僕が行きます」

励ますのでも無く、ある種の薄情ささえうかがわせるようにゲルトは言い放ち、自身の詠唱に入った。その様子を恨めしげにステラは睨んでいるが、彼にそんな悪意が全く無い以上、責めることは出来ない。励ましの声をかけるべきなのか、ルームメイトのティアマトトは少しなやんだ？？？が、結局言わなかった。

ゲルトは、魔石を持った右手を何か透明な球状物体を持つように形作り、目を半眼にして詠唱した。

「Varte, iio ante zio setue（焼け、汝その熱を以って）」

曲がりなりにも武家貴族なのだろう。普段の温和なゲルトとはかなり印象がことなる印象を受ける詠唱だった。恐らくこのような文面で世界種たちと会話をしたら、彼らはゲルトを堅苦しい人間だと思っただろう。

右手の中に、直径十センチ弱の火球が現れる。ステラのものより規模こそ小さいが、その密度は高い。まるでハンドボールのように振りかぶると、その火球を案山子に向け投擲した。放物線を描いて案山子に直撃したそれは、瞬時に案山子を火達磨に包む。その様子を、ゲルトは満足げに見ていた。

「うん！ こんな感じかな」

そうして燃え尽きた案山子の跡に、新たな案山子を立てる。次はティアマットの順。

「次は…私」

そう言った彼女は紅い石を見つめ、強く握りその姿を掌の中に覆い隠し、胸の前に両の手で連れてくる。それを胸に押し付けるような体勢で瞳を閉じて、告げた。

「Soie amt hopicutatimustax
ekokkokitaisoialcorkutdax
iamaxuwiofurashhe(その祈りと願いは、
何時しかアナタを請い焦がし…その尽くを塵と灰に帰すでしょう)」

彼女らしいと思える、そんな文面の詠唱。眼前には、今までの二人より複雑で大きな魔法円が出現する。その中心からは、直径にして一メートルはあるのかという火球が作り出されていた。ゆっくりと目を見開き、その火球を見つめる。

「a u i r e , a n h e (お願い、行って)」

その言葉に答えるように、火球は加速を伴って案山子を焼き尽くす。案山子の背後数メートルの地面にまで、余波の炎は焦げ跡を作っていた。

「な、なんちゅう火力だ……」

周囲の声を代弁するようなハイスの呟きに、振り返ったティアマットは照れたように頬を掻く。視線をななめにずらして言った。

「…えつと……うん」

そんな反応に力の抜けた一同は、気を取り直して新たに案山子を立てた。先ほどの地点は、アルバ先生が苦笑いで錬金処置で焦げ跡を丁寧に消していつている。その行動を、チラチラと申し訳なさそうにティアマットは見ていた。

「さあて」

自分の番になったハイスは、魔石をペンに見立てたかのように空中に線を描いた。紅い光は、その軌跡を残し文字を作っている。くの字のようなそれは、ルーンだった。

「K a n o c c i o (燃えな)」

メンバーの中で最短の詠唱で行われたそれは、数発の火の弾丸を生み出し、案山子を焼く。局所的に焼き落とされ、案山子が崩れ落ちる。ティアマットとは違い、技量をうかがわせるその魔術に、自

慢げにハイスは胸をはる。確かにその技量はなかなかのものだった。

そして出番はラスティに回る。立てられた案山子を見据え、ラスティは左手に魔石を握る。腕を力なく落とした体勢から、彼は詠唱した。

「O a l e x i o r a s s e (その意志は紅く)」

人差し指を案山子に向け、標準をつける。その指先に、三つの魔法円が球をつくるように描かれる。それは異質な式だった。異常に濃い色の赤い光が、球状に生成されている。

「a m u r h a l t a e r l a i e s i l f e n t (私の心は在らぬ軌跡^{みち}を駆け抜けよう)」

瞬間、熱量が収束された光球が打ち出される。それは案山子に当たると、其処を中心にするように球が膨張した。時間が経ち徐々に消えていった光の跡には、灰すら残さず案山子が消えた空間だけがあった。

驚く皆に振り返り、先ほどのハイス以上に誇らしげにしている。

「ま、こんな感じだろうな、これは」

「…魔術、かあ」

「魔術って何だろう？」ステラが言った、根本的な様で普段誰も気にする事のないような疑問。魔術一つにしても個々人というだけでアレほどまでに差が出るというその日の授業であったことに、彼ら…ラスティ以外は疑問に似た何かを抱いていた。

ステラから発せられた質問に、まずはハイスがパンをほおばったまま答える。

「式と詠語コトバで紡がれた世界の理、だっけか？」

「ごく一般にはそうですね」

そうゲルトが付け足す。そう言った‘人側の解釈’を聞いて、次はアークが発言した。此処最近、アークも一人として話すことが多くなってきている。この日は少女の姿で化身していて、服装は薄い空色の長い髪に、ゴシッククロリータ調の服装？？？少女すがたの時のアークのお気に入り（？）だ。

「世界と自己の存在のつながりとそれをもたらす心の力」と、私たち精霊は魔術コレをそのように考えます。ですが、私たちのものと皆様方人間のものとは、大分様式は異なるようですね」

「一応私も、それに近い感じで教わった」

教会を中心とした‘世界主義’と呼ばれる魔術に対する考え方のものだと、ティアマットの言葉にラスティは付け足すように言った。…ここまで来ると、言っていないのは自分だけ。皆からラスティに向けられる言葉は、容易に予想がついた。

「じゃあ、ラスティくんのところはどつたの？　どんな考え方をしたの？」

その日見せた異様な術式が、その記憶に残っているのだろう。きっと彼の故郷は特殊な考えをしているに違いない？？？？そんなステラの声が聞こえてきそうな表情だった。

ため息をついてから、降参だというように両手をあげて、正直に、いうことにラスティはした。

「正直、俺の故郷でどんな考え方をしたかは知らんぞ？　でもまあ、俺はこう、考えた、」

その言葉に、皆は興味深そうな視線をラスティに送る…ただ、アークだけはその表情を強張らせ、緊張の面持ちでいた。それに皆は気付かない。

「あくまでも俺個人の、考え、だからな？　深く考えないでくれよ？」

その言葉の、本当の意味を理解しているのは、彼の使い魔であるアークだけ。アークがその姿勢を正すのを見て、息を吸いなおして…告げた。

「実現された夢。空に描かれた理想。魔術の根本はそうである、と、俺は考えている」

「なんだそりゃ？　それじゃあまるで、この世界が神の夢ん中みてえじゃねえか」

そう言つてのけて馬鹿馬鹿しいと言うハイスに、ラスティはただ

苦笑いを浮かべるだけだった。

第十五小節「事の前の事」

「あれ、から意外と経ってないんだよな、これが」

「そうですね……」

数日が経ち、もう日課のように放課後の屋上に集合するようになっていたラステイ、ティアマツト、ゲルト、ハイス、ステラの五人ここに集まっているときだけは、アークも実体化するようになっていた。最初に実体化させたときのハイスとステラの驚いた表情は、まだ記憶に新しい。

「お、今日も早えなあ」

「ハイスさんが遅いんですよ」

そう言い合いながら、二人並んで屋上にハイスとゲルトが姿を現した。今日は神学の授業のあったゲルトは、魔術師然としたローブのままでは来ていて、ハイスは何時もの格好であった。その口ぶりから、ハイスのことを待ってゲルトは遅くなったのだろう。そして、そのすぐ後ろにはティアマツトとステラの姿も見えている。

「お、やっと皆揃ったみた……ステラ？　ソレ、なんだ？」

今日のステラの手には、夕食以外にも別の……何やら筒状にまとめた紙を持っていた。皆が弧を描くように座ると、待ってましたと言わんばかりに仰々しく話し出した。

「ふっふっふ……良くぞ聞いてくれましたラステイ君！」

そうして勢いよく見せたのは、‘新聞’????この世界は、個人の移動手段なんかはまだ馬に頼っていたりするのに、妙なところで技術が発達していたりする????その一面には…

「あ？　なんだ？　‘遺跡’？」

「そう！　そう！　この学院から結構近いとこにね？　遺跡が見つかったらしいの！」

そう嬉々として顔を紅潮させて話すステラは、将来学者になるのが目標らしい。なんでも尊敬する学者が居るらしい。

「それでねそれでね！　どうやらその遺跡にねあの‘アルナ・アマルティア’が来るらしいの！」

「へえ、あの最年少で導師号を持つあのアルナ博ですか。確か僕たちと同じ年でしたよね」

突然出てきた未知の人名に、ラスティとアーク、ティアマツトは首をかしげている。どうやら他三人の様子を見る限り、その人物は有名であるようだ。それに気付いたステラが、驚いたようにまくし立て始めた。

「ええ！　三人ともアルナ導師を知らないんですか！？　超有名人ですよ！？」

「俺は最近此処に来た人間だ」

「精霊にそれを求めないでください」

「えっと……」

三者三様の反応で答える三人。そして、ラスティとアークは、そう言ったことを後悔した。

二日ほど前、‘七年前以降の常識的な歴史の流れを知らない’ということを教えた時に、それから日が沈みきつても延々と説明された時があったのだ。彼女の眼には、その時と同じ光が宿っている。そして彼らに、ここぞといわんばかりにステラは説明を始めようとした???

「あれ？ この日って確かクラス合同での体技指導の日じゃありませんでしたっけ？」

????その時、（空気の読めない子の）救いの手が差し伸べられた。

この（話を聞かなくて済む）好機を掴もうとするラスティとアークは、ここぞとばかりに話題を転換しようとした。ティアマットは置いていかれ気味である。

「体技指導？（アーク、お前はカリキュラムを全て記録していた筈だ。速攻でこの質問に答えろ。だが程よく不十分にだ）」

「（イエス・マスター）えっと、そうですね。三クラスほど合同で、競技場の方で護身術レベルで体技指導があるそうです（どうでしょう、マスター）」

「（上出来だ）あれ？ 俺は体技とってるからいいが…クラス全員なのか？」

「はい。これは、最近はどんな職種でも、護身術レベルの体術は必要だろうという学院側の教育方針があるからだそうです。過去の戦乱での教訓が生かされているようですね」

その場の雰囲気を読み込んだ二人のやりとり。先ほどの話題からこの話題に転換することに、ラスティとアークは成功していた。

「げ！ マジかよ！ オレ体術なんてやだぜ？」

意外にも一番難色を示したのはハイス。印象的にスポーツ万能そうな彼ではあったが、意外なことに体術には自信が無いらしい。そんなハイスに、あきらめましょうとゲルトは言う。やはり一応は武家貴族の出ということなのだろうか。きっとそれなりにできるのだらう。

「あゝあ、雨でも降んねえかなあ…。」

そんな希望的観測を打ち砕いたのはゲルトの一言。

「ドームを覆うように雨避け用の結界式が土地にはられているのでどっちにしろ中止はありませんね」

そう言われて沈むハイスをからかいつつ、この日も五人は夕日が沈むまでこの屋上で語らっていた。

彼らは気付いて無かったが、この日話題が変わるまで、ティアマツトは会話に入ってくることは無かった。

????????????????????

どこか、少しだけ遠くの場所で。

曇天の暗がりの下で、全身黒で身を包んだ男と二メートル半はあろうかというヒトガタが対峙している。その周囲は土肌が見え、草木がえぐられている。ところどころにある砕かれた石が、これまでに行われていたことの次第を語っていた。

「オ a i r e アイル f e e n e フィーネ x e e n ? ジーン」

そうつぶやいた男の左手には、陽炎を纏う剣が握られている。その鏢は楕円状で、やや長めの刀身は細く、そしてやや歪曲している。この大陸では全く見られない意匠だ。

男が駆ける。踏み切られた地面は深く抉れ、その踏み込みの強さをうかがわせる。その加速度は人が可能なそれを凌駕している。それに呼応するように、ヒトガタに握られた巨大な得物が男を迎撃に奔る。

「甘いんだよな、これが」

頭上から重力加速を伴って振るわれるそれは、人が受けようものなら一撃で骨身を粉碎するであろう。だが、男はその軌道の真横に進路を取ること容易くかわしてしまう。ただ無駄に地面に全運動エネルギーを注ぎ込んだだけのそれは、余りに致命的な隙になっていた。

男とヒトガタの影が交差し、ヒトガタの左腕が肩との結合を失い、地に落ちる。男は反撃を警戒してすぐさま横に跳ねた。その空間を横なぎに暴力が通過する。

距離を開けての着地。地面を削るように停止した彼は、その口元に笑みを浮かべて告げた。

「アルゴリズムの単純なお前なんか、負けるわけなんざ無いだろ

うが！」

それは、事の前日のことだった。

「もう、分かっていると思うけど、私前は教会に居たんだ」

いつものように屋上に来ていて、この日はラスティとティアマットが早く来ていた。アークは実体化せずに主人の後ろに控えている。その日は珍しくティアマットから話が始まった。だがそれは、世間話などではなく過去の告白。

「私は孤児だったの。でも、教会の騎士の人に拾われた」

まるで大きな独り言のように夕日を見つめたままで話す彼女に、ラスティはただ相槌を打つ。仰向けになり流れる雲を見ていた。

「歌は、そのときに覚えたの。ミサの歌が、好きだった」

「じゃあ、聖歌隊に居たのか？」

体を起こしてそう質問を返したラスティに、ティアマットは首を軽く横に振ることで答える。何時もよりもひざを抱え寄せて座っている彼女の横顔を、彼女の髪は隠している。

「うっん。入、れな、かった」

その答えは本人の意思とは関係なくそうだったことを示している。いつもと同じ濃紺の服に、皮手袋の指が少しだけ食い込む。うっむき加減の彼女の視線は、夕日を捉えてはいない。

「騎士見習いだったの。剣騎士セイバだった。養父の騎士の下で、そうしてきたの」

そう告げた彼女は、片腕を…その手にはめられた皮手袋がよく見えるようにラステイ側に手を伸ばす。使い込まれたであろうそれは、特に小指の部分が擦り切れている。

「私の手は傷だらけだから、こうしてるの。やりすぎだつて義理の兄に言われてた」

肉刺まめと傷跡のついた手を、普通今の年頃の少女ならば持たない。

そんな違いに、彼女は劣等感を感じていたのだろうか。

夕日の光であっても、感情を押し殺したその声に温かみの取り戻させることはできていない。

「訓練が終わってからは、人気の無い時間にその聖堂に居たんだ。その歌唱指導のシスターは、いつもその時間帯は聖堂を空けてたの。戻ってくるころまで、そこで歌ってた」

紅い目を持った彼女に、本来教会に居場所などあるわけが無い。拾われた時点で殺されてもおかしくは無かったのだ。それが分かってたからこそ、彼女はそうしていたのだろう。

「時間になってからは、聖堂の上に隠れて、こうやって座りながら

ずっと歌を聴いてた」

聖堂内で聖歌を聴くことさえ許されない。そうして隠れて聴くほどに聴きたくても、それは紅目ディアマント・マキナには許されなかった。

「だからかな？ 赤は嫌いなのに、どうしても夕日は嫌いになれな
いんだ」
あのアカ

そう言う彼女の視線は、いつの間にか夕日に向かっていった。

結局その日、ゲルトたちが来てから、彼女は何も話すことは無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3137x/>

いつかどこかの俺の世界

2011年10月21日07時23分発行